白鷗大学論集 Vol.9 No.2 (1995) 51－108

論　文

明治・大正期の代表的機械商社高田商会(上)

中　川　　清

目　　次

はじめに
第１章　高田商会の設立
　１．開化期の佐渡と東京
　２．高田商会設立までの経緯
　３．ドイツ人ベア――『ベルツの日記』から
　４．高田商会設立の背景
　５．高田商会の設立
第２章　明治20年代の高田商会
　１．事業の展開
　２．最初の欧米旅行
　３．鉱業への関心
　４．日清戦争当時の高田商会
第３章　明治30年代の高田商会
　１．細倉鉱山の経営
　２．新規事業への進出
　３．陸軍大臣寺内正毅
第４章　明治40年代の高田商会
　１．取扱商品の多様化

2．明治40年代の『寺内正毅日記』
3．黎明期の自動車輸入
4．高田商会の園遊会
第5章　アームストロング社と高田商会
1．アームストロング社日本総代理店
2．山内万寿治海軍中将と高田商会
3．日本製鋼所
（以下、次号）
第6章　高田商会をめぐる人びと
1．帝国大学卒業生
2．東京高商卒業生
3．詩人尾崎喜八
4．広田理太郎
5．広田精一
6．細谷安太郎
7．高田家の人びと
第7章　泰平組合
1．武器輸出の背景
2．泰平組合の結成
3．泰平組合に対する疑惑
第8章　経営破綻への道
1．大正期における高田商会の業況
2．八幡製作所疑獄事件
3．経営破綻への過程
4．大正14年の高田商会
5．その後の高田商会
注及び参考文献
終りに

はじめに

明治および大正期の日本商社史あるいは経済史に関する史料に目を通していると，高田商会の名が散見される。

明治・大正のある時期の高田商会は，三井物産及び大倉組とともに我国を代表する貿易商社であり，兵器商社として内外にその名を知られていた。しかしながら，関東大震災後の我国を襲った不況のなかで，大正14年（1925）に高田商会の経営は破綻を来しているが，その後はこの商社について語られることも少なくなった。

明治以後の我国商社史に関する研究書あるいは概説書は数多く出版されているが，高田商会が詳しく取りあげられることは極めて僅かである。例えば，宮本又次・内田勝敏『日本貿易人の系譜』（有斐閣）には，「高田慎蔵，村井吉兵衛も一時貿易において成功した」という極めて簡単な記述がある。高田慎蔵とは，いうまでもなく高田商会の創始者である。貿易人としての慎蔵の活動期間は，50年間にわたっており，決して「一時」期といった短期間の活動ではない。前出の『貿易人の系譜」において高田商会の名前が出てくるのは，２，３個所程度であるが，この貿易商社の業容についてはほとんど説明されていない。もっとも，梅津和郎『日本商社史』（実教出版　1976年）の「機械専門商社の挫折」の項では，高田商会経営破綻の原因について３頁にわたる記述があるが，大正14年２月21日から28日号の大阪朝日新聞記事に準拠している。

関東大震災によって高田商会の社屋は壊滅しており，更に，その２年後には経営破綻に遭遇しているため，全盛期の高田商会に関する詳細な資料は残されておらず，社史のたぐいも編纂されていないことも，この会社について語られることが少ない理由の一つであろう。

大正14年２月，経営に挫折を来した合資会社高田商会は整理会社となり，代って株式会社高田商会が同年８月に設立されている。同社の関係者によって第２次高田商会といわれていたこの新会社も，昭和38年には日綿実業株式

会社（現在のニチメン）に吸収されている。繊維商社から綜合商社への脱皮を図っていた日綿にとって，高田商会の吸収は，機械・プラント部門強化の布石となった。この時も高田商会の一部はそのまま存続し，機械専門商社として現在に至っているのが，第３次高田商会である。

以下の稿では，明治14年（1881）に設立され，大正14年（1925）に倒産するまでの45年にわたる高田商会の軌跡を辿ってゆくが，この会社が明治・大正期を代表する貿易商社の一つとなり得た所以（ゆえん）を明らかにしたい。

第１章　高田商会の設立

１．開化期の佐渡と東京

高田商会の創始者高田慎蔵は，嘉永５年（1852）佐渡国相川で生まれている。

三井物産そして大倉組との関係については，のちに詳しく触れることになるが，三井物産初代社長益田孝も，慎蔵より４年早く同じ相川に生まれている。もっとも益田が７歳の時，佐渡奉行所に出仕していた父親が函館奉行所へ勤務替えとなったため，一家は北海道に移住している。このため，佐渡時代における益田と高田は，互いに識り合うことはなかった。とはいえ，慎蔵の実家である天野家は，慎蔵を養子に迎えた高田家とともに佐渡奉行所に出仕していたから，益田孝の５代前から佐渡の地役人であった益田家とは，知己の間柄であっただろう。

幕末の頃から兵器商として知られていた大倉組の創始者大倉喜八郎も新潟県新発田の生まれであるが，高田慎蔵よりも15歳年長である。

ところで，『自叙益田孝翁伝』（長井実編，中央文庫）は，明治期の貿易人を知るうえで興味深い伝記である。その一節に「私（益田孝）はもし三井をやらねば，大倉と一緒に（会社を）やっておったであろう。大倉もよく一緒にやってくれと言うておった」とある（括弧内は引用者）。益田と大倉の間にはいわば同郷者ともいうべき親しさがあったが，同時代の高田慎蔵に対

してもある種の同郷者意識が働いていたと思われる。

慶応元年（1865），14歳になった高田慎蔵は佐渡奉行所の管轄下にあった運上所に出仕し，下調所通弁見習となっている。彼自身の回顧談によれば，この時に「初めてエー，ビー，シーを習ひました」[1]。

佐渡奉行所の本来の業務は，金山の管理であるが，幕末を迎えたその頃，佐渡奉行所に新たな仕事が加わることになった。新潟あるいは，日本海沿岸のその他の一港の開港が，安政五国条約によって定められたからである。結局，幕府側の要求もあって，1868年４日をもって新潟港を貿易港とし，佐渡の夷港（現在の両津港）を避難港として開港することが取決められた。

その頃，英国公使ハリー・パークス卿は，新潟及び佐渡を訪れている。アーネス・サトウ『一外交官の見た明治維新』（坂田精一訳，岩波文庫）によれば，慶応３年（1867）７月，パークス公使，アーネスト・サトウ書記官などの一行を乗せた英国軍艦バジリスク号は函館を出発して，新潟及び佐渡に向かっている。目的は，新たに開港が予定されている新潟の貿易港と，避難港である夷港の事前調査である。

佐渡奉行を訪れたパークス公使の一行は，「すぐに胸襟を開いて語り，大いに酒をくみ合った」とＡ・サトウは記している。この時，接待役の一員として，高田慎蔵も供應の宴に列席していたというエピソードが伝えらている。しかも，シャンパンのコルクを抜く時に要領がわからず，パークス公使の衣服を濡らしてしまったという話が記されている[2]。こうしたエピソードの真偽のほどは別として[3]，この時初めてヨーロッパ人に接したと思われる慎蔵は，外国語学習の必要を痛感したようである。

明治新政府の成立とともに，佐渡県民政庁が設立されたが，慎蔵もそのまま新しい役所に出仕することになった。このまま佐渡にいれば，英語を満足に習得出来ないと考えた慎蔵は，英学修行のため上京することを佐渡県知事に申し入れていたが，仲々許可されなかった。結局のところ，修学のために必要な手当ては支給されないが，１年間の給料と扶持金が前払いされることになって42両ほどの金子（きんす）を手にした慎蔵は，上京することになった。

明治政府成立後の佐渡には，佐渡奉行所に代わって鉱山司が設置されており，工部省直轄となっていた。明治３年９月，鉱山正兼民部権大亟井上勝が佐渡金山を視察しているが，この時，井上勝の面識を得たと，『経歴談』で語っている。更に，英国人技師エラスマス・Ｈ・ガワーが金山の採鉱及び冶禁技術の指導のために，井上らの一行とともに佐渡に来ている。

ガワーは，鉱山及び地質調査のため日本各地を旅行していたが，佐渡に渡って来る前のガワーは，北海道の岩内（いわない）に滞在していたようである。パークス公使とともに新潟及び佐渡を旅行したＡ・サトウは，その時，北海道に立寄っているが，「この（岩内）炭鉱は最近私の友人エラスマス・ガゥアーのもとに作業が開始されていた」と『一外交官が見た明治維新』に記している。

日本各地の調査旅行の合間をみて東京に帰って来た時のガワーは，日本人女性志保井うたと暮らしていた。二人の間に生まれたのが，のちに高田商会常務となる志保井重要氏である。『高田商会開祖高田慎蔵並　多美子夫人』が同氏によって書き残されたことは註(３)で触れている。更に，ガワーのお孫さんにあたる志保井利夫氏は，「エラスマス・Ｈ・ガワーの生涯とその業績」を書いておられる（『北見大学論集』第１号及び２号。1978－79年）。

上京にあたって慎蔵は，このガワーに３通の添書を書いてもらっている。そしてこの時，ガワーが紹介状（添書）を書いてくれた相手の一人が，マルティン・ベアであった。慎蔵自身の語るところによれば，「築地のホテルに居りました獨逸の名誉領事エム・エム・ブアといふ人」である[(4)]。

その頃のベアは，築地の外国人居留地第40番にあった獨逸商館Ｈ・アーレンス商会で働いていた。英学修行のため慎蔵がこの商会で働くことになったのは，明治３年（1870）12月のことである。商会主Ｈ・アーレンス以外にこの独逸商館で働いていたのは前記のベアともう一人のドイツ人番頭，年をとった日本人の番頭，そして慎蔵の４人であった。

2．高田商会設立までの経緯

東京の「開市」が実施され，築地に外国人居留地が開設されたのは，その前年（明治2年）1月1日である。

英米企業に比べると，ドイツ系企業の我国への進出は数の上では劣っていた。外国との通商が認められた安政6年（1859）当時の長崎には，ドイツ商社6社が商館を設置していたが，やがて10社を数えるようになった。そして，横浜が開港されると，外国商館は横浜に集中するようになった。慶応2年（1865年）1月の横浜には，46社に及ぶ外国商館が進出していたが，そのうちの12社がドイツ商館である。更に時代が下って明治31年（1898）当時の我国におけるドイツ商社の総数は，横浜に20社，神戸22社となっていた(5)。

A・サトウによれば，幕末横浜居留地に支店を設置していた外国企業は，「イギリスの一流商社たるアスピナル・コーンス会社，マックファーソン・マーシャル会社，アメリカ屈指のウォルシュ・ホール会社などであった。ドイツ，フランス，オランダなどの商社は，『物の数に入らぬ』と思われていた」そして，「イギリスの某外交官が当時の横浜在住の外国人社会を『ヨーロッパの掃溜(はきだめ)』と称した」状況であった（『一外交官の見た明治維新』）。

ところで，のちの三井物産の長老となる益田孝は，明治3年にウォルシュ・ホール商会に入社しており，この外国商館で貿易業務を習得している。そして，前出の『自叙益田孝翁伝』にはドイツ人ベアについて次のように記されている。

「ウォルシュ・ホールはベアという店員を海外に派遣して，ラングンやサイゴン米を輸入した（中略）。

ベヤはドイツ人で，なかなかのやり手であった。この翌年（明治4年－引用者）独立して，鉄砲か何かの商売を始めた。これが後に高田商会になった。高田慎蔵はベヤの番頭をしておったのである」（傍点は引用者。ここでは，「ベア」を「ベヤ」と表記されている）。

ベアについて，宮島久雄「マルチン・ベアについて－明治初期一在留外国人商人の足跡」（京都工芸繊維大学工芸学部研究報告『人文』第35号－昭和

61年）がある。そしてこの研究では，ベアの来日時期を明治３年３月あるいは４月頃と推定されている。

ところで，上京した高田慎蔵は，明治３年の12月にはベアに会っており，更に益田孝の回想によれば，同じ年（明治３年）に益田がウォルシュ・ホール商会に入社した時，ベアは既に同商会で働いていた。また，前述のようにイギリス人技師ガワーの友人あるいは知人であったことから考えても，ベアの来日は明治３年よりも早い時期であっただろう。

慎蔵がＨ・アーレンス商会で働くようになった頃の築地居留地には，折角の「開市」にかかわらず東京に店を構える外国商館はまだ少なかった。既に横浜が，貿易港として一歩先を進んでいたからである。しかしながら，東京に本拠を置いていたアーレンス商会は，明治新政府特に軍関係の商売をすすめてゆくのには地の利を得ていた。慎蔵自身の『経歴談』によれば，「（軍服用の）羅紗地，小銃，靴抔（など）を輸入し」，「私（慎蔵ー引用者）が夫（それ）を陸軍へ売りに行」っていた。

まだ年若い慎蔵では，大蔵省あるいは兵部省（明治５年２月に陸軍省と海軍省に分割）への売込みに際して，満足に相手にしてもらえなった場面が少なくなかった。そんな時の慎蔵は，長州人の山城屋和助に商品を納め，和助を経由して兵部省に納入することが少なくなかったという。また，アーレンス商会が兵部省（あるいは陸軍省）に直接納入するよりも，山城屋和助経由したほうが高く売れたと，慎蔵は『経歴談』で語っている。

山城屋和助が，当時の陸軍大輔山県有朋と親密な関係にあったことは良く知られているが，明治５年11月，陸軍省の応接室で割腹自殺を遂げている。陸軍省の公金を山県から流用されていた山城屋は，生糸相場に失敗したが，山県に累が及ばないよう自刃したといわれている。山城屋和助は，明治新政府成立直後に登場した政商である。明治のジャーナリスト宮武外骨は，和助が「こんなヘマをやらなかったら，あるいは，三菱，大倉以上の大富豪になりすまし，今頃は男爵になっていたろうに」と書いている（『明治奇聞』[7]）。のちに陸海軍の「政商」といわれるようになった高田慎蔵は，若い頃にかか

わりあいを持った山城屋和助を，いわば反面教師としていつまでも記憶していたのだろう。

明治5年（1872）3月，慎蔵は，相川県（佐渡）知事より夷（えびす）港繋船場税関調役等外四等出仕を命じられている。そして，向う1年間東京に滞在して英学修行を続けることが認められるとともに，月額6円の手当てが支給されることになった。しかしながら慎蔵は，相川県の官員であることを辞してアーレンス商会の業務に専念することを決めている。

翌6年には，アーレンス商会から月額20円を支給されるようになっているが，明治7年には，タミ（多美子夫人）と結婚している。

佐渡時代の高田慎蔵が，工部省民部権大亟の職にあった井上勝の知己を得ていたことについては前述のとおりであるが，この頃の慎蔵は，井上に勧められて工部省に出仕することを考えていた。しかしながら，ベアの説得もあってアーレンス商会にとどまることを決心し，本格的に貿易人の道をすすむことにした。

ところで幕末の頃，のちの伊藤博文，井上馨ら長州出身の5人の若者が留学のため英国へ密航しているが，その時の一人が井上勝である（当時の名前は野村弥吉）。井上勝はロンドン大学で地質学を学んでいるが，この時に土木技術の知識を身につけている。のちに鉄道局長官となり「鉄道の父」といわれるようになった井上勝子爵は，高田慎蔵にとって重要な官界人脈の一人であっただろう。

H・アーレンス商会時代の慎蔵が取扱っていた商品は，陸軍省納入の兵器あるいは軍用資材だけではなかった。ドイツから輸入していた医学書も売れ行きが良好であったと，慎蔵は『経歴談』で語っている。

『実業之日本』明治30年5月1日号の「新撰近世逸話」欄は，当時の実業家のエピソードを伝える連載の雑報欄である。そして若い頃の慎蔵について，「高田慎蔵のベア商店にあるや，古画骨董の利あると察し頻(しき)りに手を広げて之を買収す」と伝えている。明治も間もない頃，価格が下落していた古い日本画や蒔絵を買集めてフランスに送っていたというのである。ところがこれ

らの古美術品がフランスに到着した頃，現地でも値下がりしていたため止むなく日本に積み戻したところ，逆に日本国内では値上がりしており思わぬ利益を得たというのである。後年の慎蔵は，その頃の実業家の例にもれず古美術の蒐集家として知られていたが，アーレンス商会時代にあっては古美術の売買も手がけていたようである。

とはいえ，兵器及びそれに関連した機械及び資材の納入が，H・アーレンス商会の業務の主流であったことは既に記した通りである。明治6年（1873）には造兵司（のちの東京砲兵工廠）工場の建設に関する仕事を請け負っている。更に，同じ年の1月には，アーレンス商会を経由して海軍が発注していたアームストロング砲六門のうち四門が横浜に到着しており，3月にはクルップ砲も到着している。高田商会はのちにアームストロング社及びクルップ社の日本総代理店となるのだが，慎蔵はアーレンス商会及び，次に述べるベア商会時代を通じて，武器商人としての知識と経験を蓄積していった。

慎蔵自身が『経歴談』で語っているように西南戦役が勃発した明治10年に至る迄の時期各地の不平士族が不穏な動きを示しており，時には反乱に及んでいた。そして，新政府による兵器の調達あるいは砲兵工廠への機械及び資材の納入のため，兵器輸入商館は多忙を極めていた。こうしてアーレンス商会の業容も拡大してゆき，明治6年（1873）には神戸支店を設置しているが，横浜とロンドンにも支店を開設するようになっている。

ところが，西南戦役の翌年，商会主H・アーレンスは，政府相手の商売に見切りをつけ民間企業と取引に切換えようと考えていた。一方，同商会の番頭であるマルティン・ベアはこれまで通りに政府機関特に陸海軍との取引を続けてゆくことを主張し，二人の意見は対立することになった。結局，アーレンス商会は，横浜，神戸，ロンドンの各支店をもって民間企業との取引を中心に存続することになった。そしてベアは，築地にとどまって，ベア商会を設立している。

高田慎蔵は，兵器商社として新たに出発するベア商会の番頭となったが，この頃の慎蔵の収入は歩合制となっており，取扱高の5分（5パーセント）

の手数料を得ていた。

3．ドイツ人ベア――『ベルツの日記』から

創立後5年経ったばかりの東京医学校（のちの東京帝国大学医学部）内科医学正教授に招聘されたエルヴィン・ベルツは，明治9年（1876）横浜に到着している。在日20年を越えるベルツは，明治9年から同38年（1905）までの見聞を書き記した『ベルツの日記』を残しており，全2冊が岩波文庫に収められているが，「お雇い外人」として来日したドイツ人が見た明治史の側面を物語る興味深い史料である。

トク・ベルツ編『ベルツの日記』（岩波文庫）の「第2編　異郷にて――明治9年から15年まで」には，前節でとりあげたマルティン・ベアの名が随所に出ている。その当時，英語風の発音に従って「ベア」と呼ばれていたMartin M. Bair は，ドイツ語の発音によれば，マルティン・バイルであり，『ベルツの日記』にも「バイル」と表記されている。

ベルツが横浜に着いたのは，明治9年6月7日であるが，同じ月の26日の日記には，同僚のドイツ人教師に関する感想に続いて次のような記述がある。

「これら少数のドイツ居留民の指導権を握っているのはバイル氏で，外面的にも内面的にもまれに見る上品な人物ですが，『ユダヤ人』であるため，氏をけなす連中も少なくはありません。」

バイルことベア（以下，この稿では「バイル」と表記する）の来日は，前節に記したように遅くとも明治3年頃と思われる。6年間にわたる在日経験を背景に，バイルは「指導権を握ってい」たのであろう。明治11年頃のバイルは，居留民のなかから選任される「代弁領事（仮領事）」といわれる領事代理を引受けていたといわれている。

ところで，明治9年11月には，日本橋から築地に至る市街が焼失し，外人居留地の一部にも被害が及んでいる。そして「アーレンスは幸運にも（火災を）まぬがれた」とベルツは記している。このアーレンスとは，高田慎蔵が仂いていたアーレンス商会の社主である（第2節を参照）。このアーレンス

については，大植四郎『明治過去帳――物故人名辞典』（私家版として昭和10年刊。昭和58年に東京美術より復刻）に次のような記述がある。

「アーレンス

東洋新航路開拓の功労者。

獨逸の商人にして我国に居留し明治19年10月18日コレラ症に罹り死亡す（日日新聞）」

『ベルツの日記』の他の個所では，アーレンスに関する記述は見当たらないが，バイルの名は再三にわたって登場している。

明治11年３月17日には，前年度の西南戦争を題材にした芝居『西郷と鹿児島の変』を観覧しているが，「恐ろしく退屈」であったと記している。「だから，お晝にバイルのところへ行き，あとでかれと一緒に再び劇場で数時間を過した」とある。

明治12年６月１日

「今夕６時，バイル，ネットー，ナウマン，シュルツェと共にプロシアのハインリッヒ親王のもとへ。」とあるが，軍艦プリンツ・アダベルト号乗組の士官候補生として来朝された親王への表敬のためである。

同行したネットーとナウマンはともに理科大学教授，シュルツェは医科大学教授であり，いずれもベルツの教師仲間である。そしてナウマンは，我国地質学の開拓者であり，「ナウマン象」の名を今に残している。バイルだけが貿易商として別の世界に進んでいたのだが，ベルツとは気が合っていた。

それから５日後の６月６日には，「精養軒のハインリッヒ親王歓迎宴は徹頭徹尾，華々しくくりひろげられ」，それというのも「500ドルのほかに，適当な芸人たちまでも提供してくれた友人バイルの殊勲である」と記されている。当時のドルは円とほぼ等価である。明治14年の巡査の初任給が６円，同19年当時の小学校教員の初任給が５円であることを考えると，500円はまさに大金である。その頃のバイルは既に相当の財力を蓄えていたのだろう。

同年７月６日

「本日午後，バイル，ネットー，ナウマンその他と横浜へ，横浜から馬車

で江の島へ」。

同年７月27日

「今日，バイルのところで晝食中」に烈しい雷雨があった。「マニラ通のバイルは，当地の雷雨の威力のちっぽけなことをあざけった」とあるが，貿易商人であるバイルは，来日前の一時期をマニラで過ごしていたのだろうか。

同年８月４日には，ナウマンに関する記述のあと，「かれ（ナウマン）はネットーやバイルと共に，自分の一番親しい友人仲間」とある。

同年10月20日

「又もやバイルと中村屋へ。日本画家の制作ぶりを見ようというのである。バイルは最も優れた画家たち（その中に狂斎もいた）を招いていた。」

狂斎とは，幕末から明治中期に至る時代を生きた異色の風俗画家河鍋暁斎（1831－89）である。近年，暁斎の特異な画風が再評価されており，埼玉県蕨（わらび）市に河鍋暁斎記念美術館がある。バイルと日本美術の関係についてはあとで触れることになるが，暁斎にも関心を寄せていたのだろうか。

明治13年３月20日

「バイルのもとで晝食。食後，三田へ馬で患者往診。そこからさらに馬で，山や谷をこえて，目黒にあるバイルの地所へ。庭園はもう出来上がっている。そして田舎風の小家屋の建築が始まったばかりである。」

上に記された三田が，現在の港区三田なのか，あるいは当時の目黒の三田村なのか不明であるが，明治11年に目黒の三田村に海軍火薬製造所の設置が決定されている。そして，アーレンス商会は目黒火薬製造所に納入される設備を受注しているが，同社の支配人バイルは，火薬製造を指導するドイツ人技師の招聘を委嘱されている。

のちに皇室の侍医となるベルツは，伊藤博文，山縣有朋などの高官達とも親交があった。そして，在日５年目のこの頃から，各国大使の家族あるいは，各界の名士の診察に忙しかった。

明治13年７月13日の日記には，「今日８時フエノロサ夫人往診（中略）次に鍋島侯の二人の子供（父侯爵の渡欧不在中，その健康を監督することになっ

ている）を永田町に見舞う」と記されている。そして，「バイルのもとで，パリから来たその義弟ビングと晝食。」

バイルの「義弟ビング」とは，パリに居住する美術商サミュエル・ビングである。明治初期における日本美術の海外流出をとりあげている瀬木慎一『日本美術の流出』（駸々堂出版株式会社　1985年）には，次のように記されている。

「ドイツ生まれの美術商サミュエル・ビングは，1875（明治８）年には早くも来日し，大量の美術品を購入している。かれが後世の歴史に残る名前となった『アール・ヌーヴォー』という装飾美術専門の大きな店を開いたのは，1895（明治28）年だったが，それ以前から日本の美術品の店を」持っていたのである。ビングが創設した美術店の名称が，そのまま，19世紀末を代表する美術様式「アール・ヌーヴォー」として用いられるようになっている。

一方，バイル自身も日本美術品を収集しており，「ベア氏所蔵日本美術品写真　25枚」を残していることが，前出の宮島久雄氏の論文「マルチン・ベアについて」に記されている。

同年11月８日

「夜，バイル来訪。彼は日本人――といってもその指導階級だが――と国内の経済資源の開発，特に農業と商業の振興を目的とする会社の設立に関して折衝中である。バイルは金持ちだ。かれにとっては，もっと金をもうけることなど，あまり問題でないことを日本人は知っている。だから，かれは落ちついて相手の申し出を待っている。国民経済の点で日本の発展に，バイルほど寄与しし得る人物は他にないという一事だけは，疑う余地がない。交渉が好結果におわることを，日本の繁栄のために祈る。」

前節で記しているように，マルティン・バイル（ベア）は明治10年にアーレンス商会から独立してベア商会を創立している。ベア商会の番頭として仂いて高田慎蔵は，上記の『ベルツの日記』が書かれた翌年（明治14年）１月には，バイルの協力を得て高田商会を設立しているが，これについては次節で詳細に触れることにする。

ベルツの記述に従えば，その頃のバイルは「日本人――といってもその指導階級」とともに新会社設立の構想を抱いていたようだが，当時まだ27歳の高田慎蔵をパートナーの候補者に考えていただろうか。高田商会が設立された明治14年，ベアことバイルは祖国ドイツに帰ってしまった。

『ベルツの日記』は，毎日丹念に記されていたわけではない。例えば明治９年には，６月26日の次は10月25日に書かれている。その翌年は，２月26日から５月14日に飛んでおり，このあと同年の記入は10月４日及び５日の両日のみである。従って，『ベルツの日記』に登場する人物として，バイルは目立った存在である。

明治14年のバイルの帰国とともに，『ベルツの日記』にバイルが登場することもないが，『日記』そのものも，明治14年５月―６月及び15年７月と10月の２個所の記述のあと，明治12年12月15日まで大きく飛んでいる。

明治22年４月20日―22日には，「高田氏と共に，宮の下及び真鶴へ。美しい林でおおわれた真鶴崎が，どんなに一流の冬期療養所や海水浴を提供するかを，氏に了解させた。氏にこの土地や，オリーブ，ブドウ，ハダンキョウの理想的好適地である附近の平地を，自分と協同で購入するよう勧めた。氏は，確かに合点がいったようだった。すぐさま，この件を政府に請願するそうだ。」

ここに登場する「高田氏」は，高田慎蔵であろう。慎蔵はその年の１月，欧米旅行から帰国しているが，ベアことバイルの在日中にベルツに紹介されているのだろう。ところでベルツは，それから４年後の明治26年12月に，葉山に別荘用の土地を取得している。結局，真鶴の土地は購入されなかったのだろう。

明治36年から37年までの日記には編集者によって，「第６編　戦雲急」のタイトルがつけられているが，日露戦争に至る当時の事情が描かれている。

そして，明治36年12月23日には，

「午後――

高田慎蔵にあう。氏もまた，今では戦争を確信している。」とある。

ところで，ベルツは明治20年頃，荒井ハナと結婚しており，明治22年には長男徳之助（トク）が生まれている。前述の葉山の土地を購した時の土地台帳には，東京氏本郷区湯嶋切通坂町を住所とする荒井徳之助の名儀になっており，明治26年頃からベルツは湯島に住んでいたと思われる。ベルツは明治35年に東京帝国大学を退官しているが，同じ湯島に住んでいた高田慎蔵とは親密な交際があったのだろう。

そして，明治37年12月25日

「友人バイルがパリで死去した（中略）。これは，かれの娘に当たる原田男爵夫人にとっては，ひどい打撃だ。なにしろ父親（バイルー引用者）に再会することが，未亡人の唯一のあこがれだったから。」

在日中のバイルは結婚しており，その相手は第１節に登場するイギリス人ガワの姉ビールではないかと，前出の宮島久雄「マルチン・ベアについて」で推測されている。しかしながら，勝田龍夫『重臣たちの昭和史』（文春文庫）には，ベア（バイル）は，「日本人女性荒井ろく」との間に生まれ「幼い照子を高田慎蔵の養女に入籍させた」と記されている。日本不動産銀行（現在の日本債券信用銀行）の頭取及び会長を歴任した勝田龍夫は，照子の息子原田熊雄の長女美智子と結婚している。従って，原田熊雄あるいはその他の関係者から，照子に関する様々なエピソードを聞かされており，上記の『重臣たちの昭和史』にも興味深く描かれている。こうして，高田慎蔵の養女照子となったバイルの娘は，のちに原田男爵家の嫡男豊吉と結婚している。

原田豊吉は，万延元年（1860）11月に江戸小石川竹早町に生まれている。明治３年東京外国語学校（のちの東京大学の前身）に入りフランス語を学んでいる。同７年15歳でドイツに渡って地質学，古生物学，鉱物学，採鉱学を学んでおり，16年には帰朝している。19年には農商務省地質局次長となり，帝国大学理科大学教授を兼務しており，古生物学を担当している。明治27年に再度ドイツに渡っているがその翌年帰国間もなく35歳の若さで病死している。とはいえ，ドイツ滞在中には既に故国に帰っていた岳父バイルに会う機会は充分にあっただろう。

原田豊吉と照子との間に生まれたのが，熊雄と信子である。ところで，東京大学名誉教授であり，学士院会長を務めた脇村義太郎の回顧座談をまとめた『21世紀を望んで――続・90年の回想』（岩波書店　1993）には，次のような一節がある（297ページ）。

「（有島）生馬先生の奥さまのお父さんは東大の地質学教授の原田豊吉男爵です。その夫人は，昔の貿易商高田商会の前身だった会社をやっていたフランス人と日本人の夫人との間に生まれた娘さんで，原田家に嫁いで生んだのが信子さんで，美人でした。その信子さんのお兄さんが原田熊雄男爵です。」

上記の座談にある「高田商会の前身だった会社をやっていたフランス人」はドイツ人の誤りである。また，原田豊吉が病死したあとも父一道は存命であったため，豊吉は男爵を襲爵していない。一道の死後，23歳の熊雄が男爵を襲爵している。

原田熊雄は膨大な「原田文書」を残しているが，『西園寺公と政局』全8巻及び別巻として岩波書店から刊行されている。原田が口述した昭和史に関するこの貴重な資料を文章化したのは，作家の里見弴である。高田家の養女となったバイルの娘照子が，里見弴の実兄有島生馬に嫁したことは既に述べた通りである。従って，里見と原田熊雄もまた姻籍関係にあり，永年にわたる友人でもあった。ドイツ人バイルと高田慎蔵との関係は，意外な所にまでひろがっていたといえるだろう。

ところで，原田男爵家は岡山藩士の出身である。熊雄の祖父に当たる原田一道は明治12年頃砲兵局長，14年に陸軍少将に就任している。そして，砲兵工廠提理を経て，元老院議官，貴族院議員等を歴任して，明治23年に華族に列せられ，男爵を授けられている。

若い頃の原田一道は兵学寮（陸軍兵学校）頭取を務めているが，桂太郎（のちに陸軍大将，首相）黒木為禎（海軍大将），長谷川好道（元帥），川村景明（元帥），乃木希典（大将）さらには，のちに高田慎蔵と親密であった寺内正毅（元帥，首相）などの陸軍の将星たちがその頃の兵学寮生徒である。

更に，原田一道が就任していた砲兵局長そして砲兵工廠提理（のちの長官）という官職は，高田商会にとって重要な職位である。バイル（ベア）の娘を高田家の養女にしたのち，原田家に嫁がせた背景には，バイルとの交友だけでなく，高田慎蔵と原田一道との関係も密接であったことが充分に考えられる。

4．高田商会設立の背景

明治初期の我国の貿易は，「外商」といわれていた外国商館によって独占されており，「内商」といわれていた邦人の貿易商社による取扱高は，下の表に見られるように極めて小さい比率である。

	輸出額（万円）	内商取扱比率	外商取扱比率	いずれか不明	輸入額（万円）	内商取扱比率	外商取扱比率	いずれか不明
明治10年（1877）	2,335	3.6%	56.0%	40.0%	2,742	1.5%	95.8%	2.7%
明治20年（1887）	5,241	12.5%	83.9%	3.6%	4,430	11.3%	84.3%	4.4%

（注）上坂酉三『貿易概論』（前野書房　昭和43年）による。但し、万円で４捨５入した。

こうしたなかで，明治13年（1880）には，政府機関が実施する「外国品購買之義ハ商ニ頼ラス成丈ケ内商ニ可頼」という内達が，三条実美大政大臣によって出されている。「スデニ支店ヲ海外ニ有スル内商モアル。其輸入ヲ奨励スル為多少の不便アルモ内商により直輸入ヲ為スベシトノ趣旨」によるものである。我国の先駆的な「内商」である三井物産は，この頃には，上海，パリ，ロンドン，に支店を設置している。一方，大倉組は，三井物産よりも早く明治７年にロンドン支店を設置しており，その翌年には釜山支店が設置されている。

5．高田商会の成立

明治政府が目指した「内商」の育成措置は，陸海軍を中心に政府機関への納入が取引の中心であったベア商会などの「外商」にとっては，商権の消失

を意味している。このため，「ベアは熟考の末，商売を廃める」と言いだしたことを，慎蔵は『経歴談』で明らかにしている。こうしてベア商会の商権は「３萬円３ヶ年賦で」，新たに設立される高田商会に買取られることになったが，「ベアは又之が為めに深切に（取引先の）商会其他の労を取」ってくれている。既に述べたように，このあとマルティン・ベアは，ドイツに帰国している。

新しい商会の設立にあたって高田慎蔵は，以前の雇主であるＨ・アーレンスに出資を要請している。「アーレンスが資本を快諾して呉れた行為は誠に謝するに余り有りです。なぜならば，其頃は今日と違ふて，外国人が日本人と組合ふのは非常に危険で，法律も何もないから，万一日本人に不埒が有っても夫（それ）を訴える所がない」と慎蔵はその『経歴談』で述懐している。明治14年頃の日本人は，欧米人からは全く信頼されていなかった。だからこそ『７年程渠（かれ）の社に勤めた私の信用もあったのでせうが実に能くやって呉れた』と，Ｈ・アーレンスに対する謝意を繰返して述べている。

更に，ベア商会で働いていた英国人ジェームス・スコットが，もう一人の共同出資者となっている。慎蔵自身の評価によれば，「非常に『綿密な男』」である。

こうして，「３人で相互の間に取り結んだのは純然たる対等契約」であり，３人は各々同額の金額を出資し，同等の権利を持って商売を行い，同等の損益を分配することにした。そして，慎蔵，アーレンス及びスコットの３人は，各人「５千円づつ持寄り，合計１萬５千円を資本として銀座３丁目18番地へ店を構へた」のは，明治14年（1881）１月のことである。

「内商」（日本国籍の商社）であることを明らかにするため，高田慎蔵が名義人となり，高田商会と称した。欧米から各種機械，船舶，鉄砲，弾薬類を輸入して陸海軍などの諸官庁へ納入するのが，この新しい貿易商会の主要業務であるが，兵器商社高田商会の誕生である。

ドイツ人とイギリス人を共同出資者とした高田商会は，まぎれもなく外国資本との合弁企業であり，当時としては稀少な存在であった。慎蔵自身は

『経歴談』で次のように語っている。

「其此（そのころ）は外国人と組合ふたとでもいえば頗（すこぶ）るいやな感情を持たれる時代でしたから，私は此（この）内部を秘密にして是まで誰にも言はない……今日貴方にお話しするのが始めてなのです」と対談の雑誌記者に打明けている。

開業当時の高田商会の社員は，英人ジェームス・スコット及びその弟ロバート。そして，ベア商会ロンドン支店に勤務していたイギリス人２名をそのまま引継いで，高田商会ロンドン支店としている。ちなみに，明治９年７月に創設された三井物産会社の開業当時の社員数は13名であったが，数か月後には三井国産方の社員52名を吸収しており，合計67名の陣営であった。

明治初期において，「内商」といわれる日本人貿易商が取扱っていた商品は，生糸・茶などの一次産品の輸出が主流であった。「売込み問屋」といわれていた生糸輸出商の取引相手は，横浜や神戸の居留地に進出していた外国商館である。その頃の横浜の生糸商としては，茂木徳兵衛，原善三郎，若尾幾造などの名が早くから知られていた。その一方で，生糸商として名をなしていた小野組及び島田組は，明治７年（1874）には早々と経営に破綻を来たしている。

「横浜の商人はいっこうに外国語を学ばない。着物も日本服である」と，益田孝は指摘している（『自叙益田孝翁伝』）。益田あるいは高田慎蔵のように，若い頃の外国商館勤めを通じて英語と貿易実務を身につけた商社経営者は，当時はそれほど多くはなかった。それだけに高田慎蔵には，取引を拡大するチャンスが残されていた。

「富国強兵」というスローガンが盛んに用いられるようになったのは，明治16年頃からである。つづいて，「殖産興業」が呼ばれるようになり，我国産業の近代化に拍車がかけられた。兵器を中心に欧米の先進機械を輸入していた高田商会にとって，こうした気運が有利に働いたことはいうまでもない。

前出の私家版回顧録『高田商会開祖高田慎蔵翁』には，明治16年（1883）７月，高田商会大阪支店が，外国品購買に関して大阪造幣局に提出した願い

書が転記されている。その頃の高田商会の業務の一端がうかがえるので，以下に引用する。

「幣店高田商会の儀は明治14年初めて東京京橋區銀座３丁目18番地に本店を設置し銃砲，其他外国品の購買営業仕陸海軍初め官省の御用相達爾来日を遂ひ営業盛大に及び英国龍動（ロンドン－引用者）に支店を置き，獨逸『クルップ』製造場，英国『セッフヰールド』鋼鉄製造場其他獨逸『クロゾン』諸器械製造場等合わせて８ヶ所に弊店の代理店を結約し且昨年（明治15年－引用者）より當府下（大阪府－引用者）に支店を設け本店同様営業仕り既に當地に於ても砲兵工廠工作分局鎮台並に府立病院の御用達罷在候（後略）」。

また，「本支店共深く信任せる外国人数名を雇入（れ）各国製造の物品を精査せしめ」とあるが，当時の高田商会の業務が，もっぱら専門的な各種機械の輸入販売であったことを示している。

第２章　明治20年代の高田商会

１．事業の展開

高田商会の共同出資者であったアーレンスとスコットは，それぞれ明治18年と21年に病死しており，２人の出資金は各人の遺族に償還されている。こうして明治21年（1888），高田慎蔵は高田商会の唯一の資本家であり，最高経営者となった。明治40年（1907）12月に合資会社高田商会に改組される迄，名実ともに高田慎蔵の個人経営が続いている。

ところで，日本で客死したアーレンスについて，大植四郎編『明治過去帳――物故人名辞典』（東京美術　昭和63年第３版発行）に短い記述があることは，前述の通りである。この『明治過去帳』には，我国において客死した外国人の氏名が網羅されているが，もう一人の出資者ジェームス・スコットの名前は見当たらない。

この頃の高田商会の事業は，どのような展開をみせていたのだろうか。

明治20年（1887）11月４日付の朝野新聞には，日本各地の砲台に設置され

る海岸砲20門の製造のため，大阪砲兵工廠に10トン反射炉２基の据付けが決定されたことが報じられている。一方，海岸砲の車台製造用鋼鉄の輸入が高田商会に依頼されていたが，このほど右の鋼材がフランスから到着したが，その代価は20万円であることを伝えている。

日本経営史研究所から刊行されている明治期の経営者に関する名著復刻シリーズの１冊に，瀬川光行編『商海英傑伝』（原著は明治26年刊）がある。澁澤英一，大倉喜八郎など，当時の実業家92名の評伝が記されているが，６頁にわたって「高田慎蔵君伝」が入っている。そして，明治20年代の高田商会に関して次のような記述がある。

「英，佛，獨，米等の著名なる大會社，大製造所は皆其代理を君の商會（高田商会－引用者）に托し今日に在ては既に一百餘の代理を兼ねるに至れり。三井物産會社，大倉組等盛なりと雖とも之を君の商會に比すれば殆んど顔色なきに幾（ひと）し。（中略）高田商會の營業は銃砲，火薬，鑛山，鐵道其他諸種の器械販賣にして仝商會の支店は之を内にしては大坂，之を外にしては英の倫敦及米の紐育に在り。而して其出張店は横濱，横須賀，呉，佐世保の四か所に在り。此本支店及出張所に於て使役する内外人は實に數百人の多きに及ひ其他技師，技手等高等の俸給を受くる者亦數十名あり爲めに毎月費す所の俸給額は實に數千圓を要せり。以て其盛況の一班を窺ふに足れり」（送り仮名及び句読点は引用者が附した）。

明治20年頃の三井物産の「使用人」が150名であったことが，『三井物産小史』(1965年）に記されている。一方，前掲書の記述によれば，明治25，６年の高田商会の社員数は邦人及び外国人を含めて「実に数百人」とある。この記述に間違いがなければ，三井物産を上廻る社員数である。そして，「技師，技手等高給の俸給を受くる者亦数十名あり」とあるが，先端技術の導入に積極的であった高田商会の一面がうかがわれる。

更に，「横浜，横須賀，呉，佐世保」など海軍関係の諸施設の所在地に高田商会の出張所が開設されていたという記述は，海軍への対応が配慮されていたことを示めしている。

2．最初の欧米旅行

明治21年5月から翌年1月まで高田慎蔵は欧米に出張しているが，その頃の欧州兵器市場は活況を呈していた。

1875－78年の露土戦争を契機に，ギリシャ，トルコ，ブルガリアなどのバルカン諸国は軍備拡充に熱中しており，ヨーロッパの兵器製造会社は受注に追われていた。更にこの頃から，新式兵器が相次いで世に出ている。例えば，アメリカ生まれの英国人ハイラム・マキシムが機関砲（正確には機関銃）を発明したのは1844年であるが，ガードナー，ガトリングなど従来の機関砲を遙かに凌ぐ性能を備えていることが次第に知られるようになったのも，この頃である。

英国とスエーデンの合弁企業であるノルデンフェルト銃砲製造会社は，1888年マキシム社に合併され，マキシム・ノルデンフェルト社となった。この会社は，潜水艦などの新兵器を手がけていたが，1897年には英国のヴィッカース社に合併され，ヴィッカーズ・マキシム社となった。

一方，1890年代を目前にして，欧米列強各国の建艦競争が始まろうとしていた。装甲板の製造あるいは造艦造機技術の改良に力が注がれていた欧米諸国を訪れた高田慎蔵が，近代兵器に関する新知識を十分に吸収したことはいうまでもない。また「仏国巴里を過ぎ獨逸へ入っては私の方で代理店を引受けてるクルップ銃砲（製造）場へ立寄った」ことを，慎蔵は『経歴談』で明らかにしている。

ヨーロッパに到着する前に，高田慎蔵は北米大陸を横断している。そして，「米国では鉱山事業が著しく発達して新式の機械も沢山出来たから，夫（それ）等を輸入して我国の鉱業に応ずる」ことを決めている。この時の慎蔵自身の現地調査に基づいて，明治24年には高田商会ニューヨーク支店が開設されている。そして，ジェームス・スコットの弟ロバートを支配人とし，「他に米人の手代と使丁（こづかい）及び婦人の会計掛」を雇っている。

高田商会ロンドン支店の支配人にもイギリス人が雇用されているが，「何故外国人を使ふ様に為った」かについて，慎蔵は，『経歴談』において次の

ように説明している。

彼自身の経験によれば，日本人は「比較的に外人を信じることがない」。そして，「外国人を雇ふのは愛国心が乏しいのではないかとされるが（中略），其土地の外人を使ふのは非常に便利を得る」と，当然といえば，至極当然な理由を挙げている。現在，世界の各地に進出している日本企業は，現地人の積極的な雇用と，進出企業の現地化を心掛けているが，明治20年代における高田慎蔵の上記の意見は，彼が先駆的な貿易人であったことを示しているといえるだろう。

3．鉱業への関心

欧米から帰国後の高田慎蔵は，新しい事業にも関心を寄せていた。米国での見聞に刺激されたのか，鉱山開発に魅力を感じていたようである。

後年の蔵相高橋是清は，ペルーの銀山開発のため明治22年に日秘鉱業会社を設立している。資本金90万円のこの会社の発起人10名は，のちに内相・宮内相などを歴任する牧野伸顕など当時の名士とともに高田慎蔵も参加しているが，詐欺にかかったともいえるこの事業は，不発のままで終わってしまった[8]。

我国最初のペルー進出企業となる筈であった日秘鉱業会社の現地調査のため，農商務省特許局長の職を投げうった高橋是清は，明治22年ペルーに赴いている。そして，『高橋是清自伝　上・下』（中公文庫）には，「ペルー銀山の失敗とその後の落魄」の章にこの時の状況が興味深く記されている。

幾多の苦労の末，ペルー北部の高地に位置する銀山に到着してみると，有望である筈の銀山が全くの廃坑であることが判明した。一方，この鉱山地帯には，米国の鉱山機械製造会社フレザーシャマル社のガイヤル技師が駐在していた。現地の事情に詳しいこのアメリカ人技術者によれば，このカラワクラ銀山開発の将来性は極めて否定的である。しかも，この銀山の鉱石を分析したところ銀の品位は非常に低く，分析結果はニューヨーク本社に報告済みであると言っている。

更に，この米人技術者は，同社の「日本代理店である高田商会（高田慎蔵も組合員であった）はそのことをよく知っているものと思っていた」と語っている（『高橋是清自伝』による。なお，ここに言う「組合員」とは，日秘鉱業会社の「出資者」を意味している）。高田慎蔵自身，彼の『経歴談』で，「米国では鉱山事業が著しく発展して新式の機械も沢山出来たから，夫等を輸入して，我国の鉱業に応ずる」と述べているのは，前述の通りである。

フレザーシャマル社の輸入代理店となっていた高田商会であるが，明治23年（1890），慎蔵は細倉鉱山会社を設立している。やがて高田鉱業会社が設立されるが，軍用資材として非鉄金属の開発は重要視されており，多分に国策的な色彩が強い会社である。

ところで，幻のペルー進出企業に終ってしまった日秘鉱業会社の現地側パートナーは，オスカール・ヘーレンである。ハンブルグで生まれたヘーレンの父親はドイツ人，母親はスペイン人であるが，両親ともに名門の出身といわれている(8)。明治2年（1869）に来日したヘーレンは，イリス商会の前身であるL・クニフラー商会に勤務している。そして，明治7年にはヨーロッパを経由してペルーに赴き，同地に定住している。

ヘーレンが5年間にわたって居住していた築地居留地は，1番から52番までの地番に分けられており，米国，英国，フランス，ドイツなどの各国から来日した外国商人が居住していた。これまでに紹介したM・M・バイル（英国風の発音ではベア）や，H・アーレンス（Ahrens）など高田慎蔵と関係の深いドイツ人もこの居留地の住人である(9)。従って，同国人のバイルやアーレンスを通して，高田慎蔵とヘーレンが親交のあったことは充分に考えられる。

ヘーレンとの関係から，慎蔵はこのペルー進出計画に関心を持ったのだろうが，なんとしても事前調査が不充分な事業であった。

4．日清戦争当時の高田商会

明治27,8年の日清戦争は，高田商会の発展にとっても大きな商機であった。

既に緊密な関係にあった陸・海軍省の特命によって，欧米各国において兵器並びに各種軍需物資を買付けるとともに，買付物資の輸送にも従事していたから，巨額の利益を得たことはいうまでもない。

慎蔵自身の回顧によれば，「火薬の原料である所の硝酸曹達」などの重要物資を，「わざわざ非條約国の南亜米利加」から輸入したと語っているが，南米チリからの輸入であろうか。またこうした非常時にあって，必要資材を「非常に安価で供給」したことから，砲兵工廠の提理（長官）が「拙者の在職中は屹度お前から品を買ってやろう」と約束してくれたことを明らかにしている。

「日清戦役に就いては随分働いた」と，慎蔵自身が語っている。また，世間では「私（慎蔵）が戦争を利用して法外の利益を貪ぶったかの様に噂して居るさうである」ことを認めている。

日清戦役後の我国は，いずれ予測されるロシアとの戦争に備えて，陸軍諸工廠の拡充に伴う各種機械装置の発注そして，海軍から発注される軍艦の建造が，高田商会の事業展開に寄与している。

ところで，明治元年から同14年に至る迄の我国の貿易収支は当然ながら輸入超過であったが，明治15年から同26年迄の期間では出超となっている。しかしながら，外国船に対する海上運賃の支払いなどによって貿易外収支は大幅な赤字を計上している。更に，日清戦役時の軍事輸送においては船舶不足に対処するため，大量の外国船を購入している。

こうした状況を背景に，明治26年には航海奨励法案が国会に提出されており，明治29年に至って航海奨励法並びに造船奨励法が施行されている。これによって，外国航路に就航する船舶に対して，また，総トン数700トン以上の鉄・鋼船に対して奨励金が交付されることになった。このため明治30年以降，日本郵船あるいは大阪商船などの海運会社はいうまでもなく，三井物産あるいは三菱合資会社など商社による船舶の購入及び造船が増加している。

高田商会も，日清戦争当時にあってはヨーロッパからの兵器輸入のため，輸送船８隻を購入している。更に戦争集結後においても貨物輸送のために，

明治30年と32年には積載量1,500トンの勢徳丸及び同2,000トンの相川丸を購入している。

日清戦争時において我国の船舶保有量は大幅に増加しており，明治28年末現在では総数528隻，総トン数331,374トンとなっている[10]。これらの数字から単純に1隻当たりの平均トン数を算出すると，628トンほどになる。明治30年及び32年に高田商会が購入した前記の2隻の貨物船は，当時としては遜色のない積載量を有していたといえるだろう。

兵器商社である高田商会は，その設立時から，陸軍に対して多岐にわたる軍器及び軍器素材を供給している。日清戦役においては，「陸海軍両省の特命に依り欧米各国より兵器を購入し之が回漕に従事し商会の基礎を固むるに足る充分の利益をあげると共に」，陸海軍発注の軍艦あるいは「陸軍諸工廠拡張用諸機械類の注文」など，各種機械・資材類の輸入によって，「英独仏米等の工業界に於ける（高田商会の）名声は益（々）高まるに至れり」と，前出の志保井重要氏の私家版回顧録『高田商会開祖高田慎蔵翁並　多美子夫人』に記されている。

第3章　明治30年代の高田商会

1．新規事業への進出

明治29年（1896）6月から12月にかけて，高田慎蔵は再度欧米に出張している。この時の出張目的の一つは，高田商会ロンドン支店長の職にあったドイツ人ショーンの死去に伴う後任者の任命であった。そして，帰国後の慎蔵は新規事業への進出を積極的に進出しているが，我国産業の近代化への過程と歩調を合わせることになった。本来，高田商会の業務は陸海軍への兵器及び物資の納入が中心となっていたが，明治30年代には，農商務省の管轄下にあった官営八幡製鉄所などの諸官庁そして民間企業へと取引先はひろがっている。

明治30年（1897）2月，農商務省は福岡県八幡村に製鉄所を建設すること

を決定している。こうして誕生する我国最初の近代的な一貫製鉄所である官営八幡製鉄所の設置に関して，高田商会は各種設備の納入を受注している。後述するように大正６年（1917），八幡製鉄所疑獄事件によって当時の高田商会無限責任社員（代表者）高田信次郎が懲役10か月の判決を受けているが，高田商会と八幡製鉄所の関係の深さをうかがわせる事件である。

明治32年には鉄道車輛の国産化を図るべく合資会社汽車製造会社が，大阪に設立されている。この時の出資社員20名には，渋澤栄一，安田善次郎，大倉喜八郎など当時の有力な実業家にまじって，高田慎蔵も参加している。こうした新規事業への参加は，いわば当時の財界活動の一環ともいえるだろうが，この頃の慎蔵は，事業の多角化を考えていたともいえるだろう。

ところで，我国最初の電力会社は，大倉喜八郎，益田孝，三野村利助などの実業家９名を発起人として明治16年に設立された東京電灯会社であるが，東京府下全域を電力供給地域として業容を拡大していった。一方，高田慎蔵も発起人の一人となって，明治24年（1891）に設立された帝国瓦斯電灯会社は，関東，北陸など広範囲にわたる電力供給区域を有していた。のちに帝国電灯会社となり，大正15年（1926）には東京電灯会社に吸収されている。こうして，東京電灯会社は関東地域のいくつかの電灯会社を吸収しているが，今日の東京電力の遠い前身である。

明治20年代以降の我国においては，電力需要が増加の傾向を示すようになっているが，高田商会は，明治30年（1897）にウェスチングハウス社の日本総代理店に指定されている。日本各地で急速に建設されていった水力および火力発電所用設備の納入に関しては，三井物産，大倉組とともに，この分野のシェアを分けあっていたが，高田商会を含めた３社の寡占状態にあった[11]。

こうして，発電機などの重電機類を中心とする各種電気機器は，製鉄用機械，鉱山関連機械類とともに高田商会の民需用機器部門の主要取扱商品となっていった。これについては，「第４章　明治40年代の高田商会」で改めて触れることにしたい。

2．細倉鉱山の経営

明治20年に帝国大学工科大学を卒業して高田商会に入社した広田理太郎は，のちに詳しく触れるように東京帝国大学で採鉱機械学を講じた採鉱の専門家である。更に，欧米から各種鉱山機械を積極的に輸入していた高田慎蔵は，前章でも記したように鉱業の関心を抱いていた。そして鉱業は，富国強兵を旗印にしていた当時の国策にも合致した事業である。

宮城県に所在する細倉鉱山は，鉛，亜鉛などを産出し，金，銀も随伴していたが，元来，伊達藩の所領となっていた。幕末期においてはこの鉱山は衰退していたが，明治23年には細倉鉱山会社が設立され，最新機械を用いて新たに開発がすすめられることになった。高田慎蔵はこの会社の出資者となっているが，同時に，新式の鉱山機械は高田商会によって納入されたと思われる。

日清戦役後の銀，鉛などの市価暴落とともに細倉鉱山も事業不信に陥り，明治32年には高田商会の経営に移管されている。

その後も業績不振が続いていたため，35年には休山となっている。しかしながら，亜鉛鉱の海外輸出が活発となったため，明治44年には高田鉱山として事業が再開されている。

第一次大戦時には亜鉛の価格が暴騰しており，更にこの頃から我国においても亜鉛精錬技術が開発されるようになったので，高田商会は会津大寺に付属亜鉛電解精錬所を開設している。大正７年には高田鉱山株式会社が設立され，細倉鉱山の経営に当たっている。

大正14年，高田商会の経営破綻とともに，細倉鉱山は債権者である日本興業銀行の管理下に入ったが，昭和９年には三菱鉱業に買収されている（この項は，昭和51年刊『三菱鉱業社史』による）。

3．陸軍大臣寺内正毅

日露戦争当時の陸軍大臣は，寺内正毅中将である（明治39年に陸軍大将に任じられている）。寺内は，明治35年（1902）に陸相に就任し，明治44年

（1911）に辞任するまで9年半の長期にわたって陸軍大臣の職にあった。

朝鮮総督，首相を歴任し，元帥の称号を授けられた伯爵寺内正毅と高田慎蔵の関係は，あとで触れるように種々取沙汰されているが，山本四郎編『寺内正毅日記――1900～1916』（京都女子大学　昭和55年）の日露戦争当時の記事には，頻繁に高田慎蔵が登場する。三井物産の益田孝，大倉組の大倉喜八郎など当時の有力貿易人も『寺内日記』に再三登場するが，高田慎蔵の名前は，民間人のなかでは群を抜いて頻出している。

ロシアに対して宣戦が布告されたのは明治37年2月10日であるが，その翌月9日の項には，次のような記述がある。

「午后高田慎蔵氏ヲ招キ禁制品ノ取寄方ニ就キ意見ヲ聴ク」。

「禁制品ノ取寄（セ）」とは，ロシアの同盟国及び，同盟国の影響下にある国々あるいは中立的立場をとっている国々からの軍需物資の緊急輸入を指しているのだろう。前節に記したように，日清戦争当時の高田商会が「火薬の原料である所の硝酸曹達」などの重要物資を「非条約国」から輸入したことが，高田慎蔵の『経歴談』に語られている。この時の同じようなオペレーションについて寺内陸相から意見を聴取されたのだろう。

更に，同月14日には，

「高田慎蔵氏来リ上海ニアル兵器取寄ノ事ニ就キ意見ヲ述フ」

とあるが，高田商会が外国から輸入した兵器を日本国内あるいは戦場となっている中国大陸に移送しようとするのであろうか。

同年7月15日の日記にも，「高田慎蔵来訪」とあるが，会談の内容については何も記されていない。

同年8月から12月の寺内日記には，高田慎蔵の名前が散見される（引用は関係個所のみとし，その前後は省略した）。

8月27日

午前押上少将ヲ招キ龍動（ロンドン――引用者）及エツセン兵器ノモノヲ本国ニ送リ方ニ就キ注意ヲ与フ

高田慎蔵氏来リ英国支店ヨリ電報アリ。只簡単ニ過キ確実ナル事ヲ知ルヲ得

ス後報ヲ待ツ

8月28日

午后高田来リ英国ニ薬筒ヲ注文ス，押上少将ヲ招キ本件ノ始末ヲ命ス

9月8日

夕（刻）高田来リ英京ノ電報ヲ示ス

9月9日

夕（刻）高田慎蔵氏来ル。明日午后二時ヨリ工廠へ至ルヘキ旨ヲ談ス

10月2日

（前略）中村製鉄所長官高田ト共ニ来リ製弾器械ノ件ヲ相談ス

「製鉄所長官」とは，八幡製鉄所長官である。この官営製鉄所と高田商会の関係については，後述の「八幡製鉄所疑獄事件」の項で触れることにしたい。

10月16日

夕（刻）高田慎蔵氏電報ヲ持チ来ル。（明日）午前九時ヨリ工廠提理其他ト砲兵事務ニ就キ協議セシム。多数ノ砲弾製作ノ件略（ほぼ）見込立テリ，直ニ製造ニ着手セシメントス

11月9日

夕（刻）高田慎蔵氏来ル。英国ヨリ電報ヲ示ス

12月12日

高田慎蔵氏来リ来英電文ヲ示セリ。

明治37年のこの時期，高田慎蔵以外の実業家の来訪については，11月8日に項に次のような記述がある。

益田孝氏来訪，営口（中国大陸の地名——引用者）ヨリ帰来セシモノ，軍馬買入談等アリ。追テ其人ニ面会スヘキ旨ヲ依頼ス。大倉喜八郎来訪，ジナミット爆薬製造ノ件内談アリ。追テ調査スヘキ旨答ヘ置ケリ

三井物産，大倉組をそれぞれ代表する二人の実業家に対する寺内陸相の対

応は，いささかそっけないように思われる。三井，大倉といった貿易商社に比べると高田商会の規模はいささか見劣りするのだが，高田慎蔵は寺内の信頼を得ていたようである。

翌38年の寺内日記の記述を追ってゆくと，

3月18日

午后高田慎蔵氏英国ヨリノ電信ヲ来リ示ス

3月31日

11時アームドロンク氏来訪。同社ノ12野砲ノ図面ヲ予ニ送ル為メ来訪セリ

5月15日

午后7時半高田慎蔵氏ノ晩餐ニ招カル。夫妻列席ス。当日ハ英国人ノブル氏夫妻ノ帰国ニ就キ送別ノ為メナリシ。（後略）

3月31日の「アームドロンク氏」とは，アームストロング社社長ウイリアム・ジョージ・アームストロングであり，5月15日の「英国人ノブル氏」は，同社副社長サー・アンドリュー・ノーブルである。アームストロング社が製造した軍艦，大砲などの兵器類が日清戦争において偉力を発揮したことから，明治28年にはアームストロング社長は勲二等旭日章，ノーブル副社長は勲二等瑞宝章を授与されている。そして，高田商会はアームストロング社の日本総代理店に指定されていたが，これについては改めて詳しく触れることにする。

更に，5月20日の日記には，

「長岡次長来訪明石大佐ノ電報ヲ示サル，一ノ写ヲ請求シ置ク」とある。

日露戦争開戦時，在ロシア日本公使館付陸軍武官であった明石元二郎歩兵大佐（当時）が，開戦後はロンドンを中心にヨーロッパ各地において，反ロシア勢力を支援するために様々な謀略活動を展開していたことは良く知られている。なかでも有名な活動は，スイスで購入した小銃2万5千挺と弾薬420万発を黒海及びバルチック海方面に輸送し，革命派勢力に供与するという作戦である。

その頃ロンドンに本拠を置いていた明石は，高田商会ロンドン支店の協力を得ることにした。陸軍と関係の深い大倉組商会あるいは三井物産も当時のロンドンに支店を設置していたのだが，明石は敢えて高田商会の協力を求めている[12]。

小森徳治『明石元二郎　上・下』（昭和３年　台湾日々新聞社）はのちに台湾総督となった明石大将に関する詳細な伝記であるが，次の一節がある。

「そこで，我が高田商会の倫敦支店に事情を打明け，萬事の世話を依頼することとすると，支店長の杉谷卯之助氏（仮名）は又，店に関係の深い友人スコットに相談して，以下の如き案を立てた。」

ロッテルダムにある高田商会の代理店「コルドネ商会」及び「英国の高田商会の取引先なるワット」などの協力を得て，ロシア国境近くまで秘かに兵器類を輸送するという作戦である。更に，銃器類の輸送に使用された「ジョンクラフトン号の購買も，亦高田商会の盡力に待ったものである」と，前掲書に記されている。

既に紹介した志保井重要氏の回顧録『高田商会開祖高田慎蔵翁並　多美子夫人』には，「陸海軍両省の特命に依り海軍依り兵器弾薬其他材料品等の購買及運搬に従事す」とある。更に，「同年（明治37年－引用者）大本営の内命に依り特別任務に従事したるも事秘密に属するを以って茲に記載する能わざるも幸に瑕なく其大任を果したり」と，いささか秘密めかした記述が続いているが，前述の明石大佐に関係する「特別任務」である。

「日露戦役の行賞に際し，高田慎蔵氏が一商估の身を以って勲四等の栄勲を辱うするに及んで，人或は其何んの故なるを怪しみたらんにあらんも，実は此兵器輸送問題に就ての，少からざる功労を表彰されたものである。」

と，小森徳治『明石元二郎　上巻』にある。

「此兵器輸送問題」とは，反ロシア政府勢力に対する武器輸送を指しているが，むしろ，欧米における各種軍需物資の買付け及び，日本への輸入に対する高田商会の活動が，日露戦役後賞されたものと理解されるべきだろう。従って，高田慎蔵以外にも，高田商会ロンドン及びニューヨーク支店に勤務

していた英米人社員に対しても勲五等を，ロンドン支店支配人広田理太郎，同支店長代理柳谷己之吉及び同支店勤務の志保井重要の３名には勲六等旭日章が授章されている。他にもこの戦役への功労に対して，高田信次郎など社員５名が勲六等瑞宝章の敘勲を受けている。なお，前出の『明石元二郎　上巻』に，「支店長の杉谷卯之助（仮名）」とあるのは，支店長代理柳谷己之吉であることは言うまでもない。

以下の章で触れるように，明治の半ば頃から大正期を通じて，高田商会と海軍の関係は何かと取沙汰されている。現在でも岩波文庫に収められている『日本の下層社会』の著者として知られる横山源之助は『明治富豪史』（明治43年刊）を書いているが，その第一節「戦争」には，次のような記述がある。

日露戦役で巨額の利益を得た岩崎家あるいは三井家などの財閥は別格としても，陸軍省の用命を受けた大倉喜八郎と，「海軍省の御用命を受けた高田慎蔵」は，稼ぎ頭として「東西の両大関」である。そして，大倉組や高田商会を傍で見ていると，戦争のお蔭で「毎日毎日身代が太ってくる」のが眼に見えるようだと記しており，彼等にとって「戦争は福の神」と極言している。

上の文章は，もともと明治38年９月から翌年３月まで雑誌『商業界』に連載された「明治実業暗黒史」の一節である。日露戦争の戦後処理に大きな不満を抱いていた民衆の「受け」を狙った誇張が感じられるにしても，御用商人といわれていた大倉組や高田商会に対する当時の人々の意識の一端を示しているといえるだろう。また，明治30年の終り頃には「高田商会と海軍」の関係が，広く知られるようになっていたことを示しているともいえるだろう。

第４章　明治40年代の高田商会

１．取扱商品の多様化

我国近代化の進展とともに，日本の貿易量も増大しており，貿易構造にも変化が見られる。明治期における貿易量の推移を示めすと下の通りである。

	輸出総額(万円)	輸入総額(万円)
明治 5年(1872)	1,703	2,617
15年(1882)	3,772	2,945
25年(1892)	9,110	7,113
35年(1902)	25,830	27,173
45年(1912)	52,698	61,899

出所・大久保利謙編『近代史史料』(吉川引文館　昭和40年)
による。但し、万円の単位で四捨五入した。

更に，輸入総額における「器具及び機械」が占める比率を見ると

明治 5年　1.3%

15年　3.4%

25年　5.6%

35年　5.4%

45年　7.3%

であるが，これらの数字は民間ベースの輸入に限られている。従って，明治期の我国陸海軍が積極的に輸入していた各種兵器，艦船などは除外されている。

ところで，明治初期の我国貿易は外商によって独占されていたが，時代の流れとともに邦商といわれる邦人企業による取扱量が増大している。

	輸出		輸入	
	外商取扱比率	邦商取扱比率	外商取扱比率	邦商取扱比率
明治10年	96.0%	3.6%	95.8%	1.5%
20年	83.9%	12.5%	84.3%	11.3%
30年	70.5%	27.2%	63.5%	36.2%
33年	60.9%	35.8%	60.3%	39.3%

出所・津田昇『日本貿易の史的考案』(外国為替研究会　昭和45年)

日露戦争の頃には，外商と邦商の取扱比率は逆転しており，第一次大戦直前の邦商取扱比率は輸出52%，輸入では64%に達するようになっている。

こうした貿易量の増大と構造変化のなかで，高田商会の取扱高がどのように増加したかを明きらかにする資料は残されていないが，取扱商品の多様化を示すいくつかの資料がある。

海軍との関係が深い高田商会は，早くから船底塗料を手がけていた。一方，明治34年，清水鎮次郎が船底塗料の防錆及び防汚に関して２種類の特許を取得している。そしてこの特許の工業化のため，36年には高田商会の一部門として清水船底塗料製造所が東京府荏原郡大崎町（現在の品川区大崎）に設立され，明治40年には高田船底塗料製造所に改稱している。大正14年の高田商会の経営破綻とともに，株式会社高田船底塗料製造所に改編されているが，昭和12年には日本油脂に合併されている（『日本油脂社史』による）。

同じく明治40年には，東京府北豊郡尾久村荒川畔に荒川製作所が設立されている。高田商会の子会社であるこの社の業種は，各種荷役機械，動力機械などの製造並びに販売である。荒川自働荷役船，石炭コンベアー，アツシュ・コンベアー，鉱山用捲揚機，天井懸起重機，渦巻ポンプ，水力タービン，各種フワン（換気装置）など荒川製作所の商品広告が，大正11年７月号から１年間にわたって「電気学会雑誌」に掲載されている。これらの製品は，各地の鉱山，火力発電所や主要顧客先となっていた。

ところで，「電気学会雑誌」は，榎本武揚子爵を会長とする電気学会によって発行されている。11名の評議員の中には，東京帝国大学教授田中館愛橘（のちに文化勲章を受賞）とともに，高田商会電気部長広田精一の名が見られる。

高田商会が明治30年にウエスチングハウス社と代理店契約を締結したことは，既に記した通りである。そして，明治41年当時の「電気学会雑誌」には，ほとんど毎号のように高田商会の商品広告が掲載されているが，「電線及び電纜」にはじまり，重電気機械に至る多岐にわたる商品構成である。

明治41年２月号には，「ウエスチングハウス社製瓦斯機 Westing Vertical Three Cylinder Engines」が，翌３月号には「ウエスチングハウス製汽機連結発電機　東洋代理店高田商会」の広告が掲載されている。そして，「目下我国使用者45ヶ所　目下我国使用台数98台」と記されている。

更に，「ウエスチングハウス社製移動電動機付空気圧搾ポンプ装置 Portable Motor Driven Air Compressor Plants」の広告が，同年５，８，９月号

に掲載されている。そして「一台ニ付（キ）壹千二百円」の価格が明記されている。ちなみに，『値段史年表』（朝日新聞社　昭和63年）によれば，明治39年における巡査の初任給が12円である。その他のウエスチングハウス社製製品としては，「ウエスチングハウス・パーソンス式 Turbine Generating Units」の広告があるが，「壹萬キロワット双方式蒸氣タルビン発電機」と説明されている。

他社製品としては，「高田商会銀座販売店取扱い　ウオルフラム白熱電灯球 Walfram Lamps」の広告が掲載されているが，「代価壱個ニ付　金貳円」とある。なお，高田商会銀座販売店 GINZA STORE は明治37年11月に開設されているが，同社の直販店であると同時に，ショウ・ルームの役割を果していた。

『電気学会雑誌』明治41年７月号には，「OHIO BRASS Co., Line Materials オハヨーブラス会社　電気鉄道用品一式」の広告がある。その頃，日本各地で着手されるようになっていた電気鉄道建設の動きに対応するものである。

同じ年の『電気学会雑誌』には，「マリーンエンジン・エンド・マシーン会社製　セコア・オイル・エンヂン Secore Kerosene Oil Engine」が，「自家用電灯用，各種工場動力用」として広告されている。同じく，「自家用発電所，小工場用トシテ高評。続々新荷到着　在庫品益（々）豊富」の謳い文句とともに，「チュードル蓄電池ウエスチングハウス社製小形汽機発生連結式」の広告が，同年11月号に掲載されている。当時の我国における近代的工場の増設及び動力化に対して，高田商会が積極的に参加していた状況がこれらの掲載広告にうかがわれる。

2．明治40年代の『寺内正毅日記』

寺内正毅は，明治40年に子爵に敍せられているが，44年には伯爵に昇爵しており，朝鮮総督に就任したのもこの年である。そして，大正５年には元帥の称号を授けられており，同年10月には寺内内閣が成立している。こうした背景を念頭に入れて，『寺内正毅日記』に登場する高田慎蔵を追ってゆこう。

明治41年４月16日

夕（刻）高田慎蔵氏ノ招待ニ赴ク。列ヲ同フ（ス）ル者山県大山ノ両公其他十余名，11時官邸ニ帰ル

陸軍の元老山県有朋，日露戦争の功労者大山巌元帥などの最高実力者が列席するとは，高田慎蔵の実力の程を垣間見る思いである。

同年６月13日

今朝独逸技師ドラランド及高田釜吉来訪麻布ノ家屋建築ノ事ヲ相談ス

同年６月14日

午前在邸訪客ニ接ス。技師ドララント氏家屋設計図ヲ携へ高田釜吉氏同伴来訪新築ノ大体ヲ協議ス

高田釜吉は，慎蔵の次女雪子の婿養子である。高田商会副社長を経て社長に就任しているが，「高田家の人々」の項で改めて触れることにする。「技師ドララント氏」もまた高田商会の関係者であるが，改めて後述する。

同年６月17日

夕（刻）東郷大将トムソン一行ヲ三井倶楽部ニ招待ス。予ハ今夕高田慎蔵氏に招カルルヲ以テ列席セス，妻之ニ列ス。

「米国陸軍トムソン大佐」の来日が，数日前の日記に記されている。東郷大将の招宴であるが，これを欠席した寺内大将は高田慎蔵の宴席に出ている。

同年７月７日

午后在宅用弁ヲ為ス。高田及後藤氏来訪諸種ノ談話アリ

高田慎蔵とともに寺内を訪問した後藤（新平）は，その頃初代満鉄総裁の職にあったが，のちに寺内内閣の外務大臣を務めている。

これまで引用させていただいた山本四郎編『寺内正毅日記』には，明治42年（1909）の日記が欠けていると注記されている。

明治43年１月11日

夕（刻）高田慎蔵ノ催フセル宴会ニ列ス

同年４月19日

夕（刻）高田慎蔵氏宅ニ招カル。会スル者山県公桂松方田中平田他十数名ノ

諸子ナリシ

この時の高田慎蔵の招宴には，山県有朋，桂太郎大将，田中義一中将（当時）などの陸軍の実力者に，公爵松方正義が加わっている。明治29年に第2次松方内閣を組閣して首相兼蔵相として日清戦争後の財政を切り廻しているが，松方は明治の元老の一人である。平田とあるのは，農商務相，内相などを歴任した平田東助伯爵であろう。

同年4月26日

午后七時半高田氏ノ招待ヲ受ク。仏米大使，小村，小松原及予（余）其他数名ナリシ。食后余興アリ一同歓ヲ尽シ十時過帰邸セリ

駐日フランス及び米国大使とともに，小村寿太郎外務大臣が出席している。この頃の高田慎蔵は，陸海軍の高官のみならず外務省関係者を中心とする招宴も開いていたのであろう。

明治44年9月7日

本日午前八時半発汽車ニテ箱根湯本ナル高田別邸ニ到ル。当分滞在ノ見込ナリ。来レハ高田氏先ツアリ。午前11時着，終日対談夜ニ入ル。近来ニナキ心閑静能ク眠レリ

9月12日

本日若シ晴天ナレハ高田氏ト共ニ宮ノ下ニ行クノ約アリシカ，雨ナルヲ以テ之ヲ止ム

朝鮮総督に就任した寺内正毅は，明治43年7月に京城に着任している。上の日記は，その翌年の一時帰国の際の記述である。

後述するように大正4年12月の衆議院予算委員会において，三土忠造代議士は泰平組合に関する疑惑を指摘している。そして，上の記述にあるように，寺内総督が高田別邸に「当分滞在」していた事実をもって，三土代議士は，二人の親密な関係に疑惑の眼を向けている。

この稿における『寺内正毅日記』からの引用は，高田慎蔵に関する個所のみを取り出しているが，寺内正毅を介した高田慎蔵と陸軍の最高実力者との交流は極めて興味深い。後述のように山内万寿治中将を中核として，高田商

会と海軍の関係は，何かと取沙汰されており，陸軍省の用命を受けていた大倉喜八郎に対して「海軍省の御用命を受けた高田慎蔵」と，横山源之助が『明治富豪史』で評しているほどである。陸海軍との関係が密接であったため，「政商」と評されていた高田慎蔵であるが，特定の海軍関係者との親交を裏付ける直接的な資料は残されていない。

『寺内正毅日記』は寺内が没する前年の大正７年（1918）まで続けられている。大正期に入っても高田慎蔵の名は『日記』に散見されるが，これまでに見て来た明治37－43年の時期に比べるとその頻度は少なくなっている。

３．黎明期の自動車輸入

我が国に到着した最初の自動車であると伝えられている米国製電気自動車と，明治33年当時高田商会電気部長であった広田精一との関係については，次章の「５．広田精一」で詳しく触れるが，そうした関係もあったのだろうか，明治期の先端的技術商社である高田商会は，黎明期の自動車輸入に参加していた。

明治36年（1903）の大阪では，第５回内国勧業博覧会が開催されている。そしてこの時高田商会が「自動車部品を出品したのは事実である」と，自動車工業会編『日本自動車工業史稿（1）』（昭和40年）に記されている。我国の自動車輸入黎明期における高田商会の状況について，同書にはいくつかの記述があるので以下に引用させていただくことにする。

「高田商会が初めて自動車輸入販売に着手したのは明治43年頃のことで，車はアメリカ製のクリッド（Clyde）に始まる。当時はシャシーを輸入してボデーは芝三田四国町の馬車製造業鶴岡留吉氏の工場を指定し，責任者大戸淳三氏の手により車体製造架装を行わせた。

高田商会はそれを機会に自動車部を新設し，銀座１丁目６番地，今の富士銀行銀座支店の場所が，自動車部の本拠であった。販売関係者は英人スコット，Ｊ・Ｄ・メーソンの両氏と，日本人責任者木村兼次郎氏らの人々がそれに当たった。これが同商会の自動車販売の最初であり，やがて大正期の活溌

化に到る。」

明治36年の第5回内国勧業博覧会に高田商会が出品した自動車部品に関心を抱いた京都の実業家がいた。自動車運輸業の先駆けとなるべく，二井商会（「じせい」商会。一般には「にい」商会と呼ばれた）が設立されている。そして，輸入自動車の見積書提出が高田商会に依頼されている。高田商会の社名が記され社印が捺印された見積書の写真が，前出の『日本自動車工業史稿 (1)』に掲載されているが，以下の内容である。

見積書

一、英国製自動車　ワグネット型　壱台

附属品共六人乗五馬力半

此代金伍千参百貳拾壱円六拾五銭

一、企上　壱台

附属品共八人乗五馬力半

此代金伍千四百貳拾円拾銭

右以て代價御注文當日ヨリ向フ六ケ月半以内ニ取寄之上納仕候也

明治三十六年九月二日

結局，二井商会はアンドリュウス社扱いのロコモビル蒸気自動車2台を購入し，京都市内を走る乗合自動車業を明治36年9月に開業しているが，我国における自動車運輸事業の始まりである。もっとも，翌年2月にはこの事業は行き詰まっており，当時としては多額の債権が残されることになった。

前出の『日本自動車工業史稿 (2)』には，「自動車部品の販売」の項があり，「高田商会が先駆者」の見出しとともに，次のような記述がある。

「自動車部品の販売で古いのは，なんといっても高田商会である。同商会は明治36年の大阪の第5回内国勧業博覧会に，輸入した自動車部品各種を出品したことは前に述べた通りで，そのころから発足したことは，自動車部品の販売として日本の先駆者と認めてよかろう。

なお，明治末期の刊行とみられる同社のパンフレットをみると，ラッパ警

報機，メーター類，ランプ類，ゴム部品，その他広範な輸入部品を扱っていることがわかる。明治年間に自動車試作や製造，または修理を行った人々が，その種の部品を入手した先は，ほとんど高田商会であったと考えられる。」

同書には2頁にわたって，高田商会取扱いの自動車部品の写真7葉が掲載されている。最上段に「自動車附属品」，最下段に「高田商會銀座販賣店」と印刷されているが，「Rubber Goggle ゴム製目鏡」，「Large Taxi Head Lamp 大型タキシー車用前面燈」と，品名は英和併記のカタログである。

『日本自動車工業史稿（2）』は大正期及び，満州事変に至る昭和初期を対象としているが，「1．関東大震災前の部品需給状況」の項がある。「元来震災前は，明治から引継ぎに等しい自動車の創始時代」であり，自動車が故障しても「部品の入手に欠くのが概して一般的な傾向であった。（中略）その中で部品のサービスに力を注いだのは高田商会，日本自動車，梁瀬自動車㈱，アンドリュウス商会（正確にはアンドリウス・エンド・ジョージ合名会社），英国系のイリス商会」などであり，「それらが部品供給の一経路であった。」なかでも，「高田商会は，明治30年代のわが国自動車の黎明期から，自動車部品を輸入し販売した会社である」。このため，自動車部品を入手したければ，「高田商会へ行けば何とかなるといわれた程である。」

ところで，自動車時代の先駆けとなるフォード自動車会社が設立されたのは，1903年（明治36年）である。「タカヂアスターゼ」で知られる高峰譲吉博士は，1902年のニューヨークに高峰研究所を設立していた。そうした関係から，三共商会（現在の三共製薬）がフォードの輸入販売権を取得したのは明治42年である。しかしながら，6台のフォード車を売っただけで，明治43年にはセール・フレーザー商会に販売代理権が移されている。

一方，この頃から高田商会，大倉商事，三井物産の各社が自動車の輸入・販売を手がけるようになっている。機械類の輸入では当時の代表的商社と評価されていた高田，大倉，三井の三社がここでも顔を揃えていたことになる。

大倉組は輸入自動車の販売会社として大日本自働車を設立しているが，のちに日本自動車株式会社に改組されている。三井物産の自動車販売会社は梁

瀬自動車商会であるが，高田商会は後述のように「自動車販売所」を設立している。前出の『日本自動車工業史稿（1)』によれば，高田商会の自動車部品の輸入は明治36年頃，自動車輸入は40年頃にそれぞれ開始されている。自動車輸入の分野においても，高田商会は先駆的な存在であった。

尾崎正久『日本自動車史』（自研社　昭和17年）によれば，高田，大倉，三井の他に日本企業９社，外国商会10社が当時の自動車輸入業者として挙げられている。

また同書には，明治も終り頃における全国自家用自動車所有台数として，下の数字が示されている。右側のカッコ内の数字は，柳田諒三『日本車三十年史』（山水社　昭和19年）に示されている数字である。正確な統計が作成されていなかったため，いずれも推定数字が採用されている。

日本全国の自家用自動車累年台数

明治40年	22台	（　16台）
41年	53台	（　29台）
42年	95台	（　69台）
43年	126台	（ 116台）
44年	238台	（ 210台）
45年	354台	（ 不明 ）

上の数字は，各年の累積台数である。明治40年以降の増加数（前年度との差）が，年間輸入台数と考えても良いと思うが，正確な年間輸入台数及び金額は不明とされている。

高田商会が輸入した自動車台数は不明であるが，大正９年11月現在の「合資会社高田商会人員表」によれば，同社の「自動車販売所」の人員数は，兼務者１名を加えて９名となっている。前出の柳田諒三『日本車三十年史』によれば，大正11年における全国自動車台数は14,886台である。明治40年当時の16台（あるいは22台）に比べると，大幅な増加である。

更に，尾崎正久『日本自動車史』には次のような記述がある。

「大正時代となるや，自動車の需要も漸次増加したので，セールフレーザー，

高田商会，三井物産，大倉商事等貿易商社は直接外国製造，輸出業者と特約輸入販売契約を行ふようになった。此のため欧米のあらゆる種類の自動車の輸入を見るに至り，大正７年の如き百余種類を輸入してゐる。」

大正12年の関東大震災後，我国の自動車台数は急激に増加しているが，高田商会は同14年に経営破綻を余儀なくされている。

高田商会の自動車輸入を担当していた英国人Ｊ・Ｄ・メーソン及び木村兼次郎は，高田商会の破綻後も米国車クライスラーの輸入を継続するため，大正14年６月，当時の赤坂区溜池に八州自動車株式会社を設立している。その際，資本金の大部分を出資したのは在日スイス人のミューラであるが，Ｊ・Ｄ・メーソンが専務取締役に就任して経営を担当した。

上の記述は『日本自動車工業史稿 (2)』によるものであるが，同書の「メーソン氏の略歴」の項には，次のように記されている。

「Ｊ・Ｄ・メーソン氏は英国の逓信省技師で来日した父が，日本婦人と結婚して生まれた混血児であり，英国の大学を卒業して純粋の英国婦人を妻としている。日本の自動車黎明期に当たる頃から，すでに自動車に関係したといわれ，次いで高田商会で自動車輸入を発展させた。」

そして，前出書が刊行された昭和42年当時，「今も80余歳で存命している。在日英人中で名文家といわれ，ブリヂストン・タイヤ会社の嘱託として，今も英文関係を担当している。」

４．高田邸の園遊会

事業の展開とともに，高田慎蔵は富かな財力を築き上げている。

明治34年９月22日付時事新報は，「全国で50万以上の資本家141人」を報じている。かつての大藩の旧藩主である前田元昭公爵あるいは，三井八郎右衛門男爵，澁澤栄一男爵など財閥系の資産家とともに，「輸出入商　高田慎蔵」の名が見られる。

更に，大正５年10月５日付の時事新報にも，「全国50万以上の資産家」が報じられている。三井家，岩崎家なとの財閥は別として，貿易商としては，

大倉喜八郎が3,000万円，高田慎蔵が2,000万円の資産家である。その頃，三井物産をも凌ぐと貿易商社といわれていた鈴木商店の店主鈴木ヨネの資産は1,500万円となっている。職業が貿易商として掲載されているのは，大倉，高田そして鈴木ヨネの3名の他には，大阪の範多重太郎（資産1,300万円）だけである。

雑誌『実業之日本』の連載座談記事「実業家経歴談」に，明治35年1月1日号から5月1日号まで9回にわたって掲載された「海外貿易の泰斗　高田慎蔵氏経歴談」は，高田慎蔵に関して現存する数少ない資料の一つであるが，この論稿でも『経歴談』として再三にわたって引用している。この頃の高田慎蔵が実業家として名を知られるようになったため，貿易界の「泰斗」として登場するのだが，当時の先駆的な貿易人の考え方を知るうえでも興味深い内容である。

この『経歴談』は，「金令子」と号する『実業之日本』記者による談話筆記であるが，座談の場所は高田慎蔵の「湯島の新邸」となっている。当時の地名では，本郷区湯島三組町58番地の高台である。現在の地名表記では文京区湯島3丁目であるが，旧岩崎家本邸からそれほど遠くない場所である。

東京大学工学部建築学科の遠い前身となる工部大学校造家学科初代教授として，明治10年に来日したジョサイア・コンドルは明治期を代表する多くの建築家を育てるとともに，自からも鹿鳴館などの記念碑的な建造物の設計を手がけている。更に，前出の湯島の岩崎邸など当時の有力な実業家の邸宅を設計しているが，高田慎蔵もまたコンドルによって設計されている。

鈴木博之（東京大学教授・建築史）は，月刊誌『東京人』平成6年7月号に，「湯島切り通し地霊譚」を書いているが，次にその一節を引用させていただく。

「岩崎邸から南に4，5分も歩けば，かつてはもう1軒のコンドル設計の邸宅に行きあたった時代があったのである。その邸宅は高田慎蔵の屋敷だった。当時の住所でいえば三組町58番地がその所在地である。レンガ造2階建て，張出し窓がつき，輸入品らしい鉄とガラスでできた車寄せの美しい邸宅だっ

た。規模はさほど大きくなく，ちょうどヴィクトリア朝のロンドン郊外にでも建っていそうな住宅である。

ここに住む高田慎蔵は，高田商会を興し，日露戦争当時にはその資産約2,000万円といわれた。一時は，高田商会が機械の輸入では日本の商社中最大の取り扱い高を誇っていたのである。」

そして，「高田慎蔵邸の地下には，本格的なワイン・セラーも備えられていた」として，高橋箒庵の次の文章を引用している。

「高田氏は性来左利（ひだりきき）であつた中にも，最も洋酒を嗜み，彼が湯島の西洋館地下の洋酒倉には，葡萄酒其他各種の洋酒類を蓄積し，凡そ百年位前より，出産年別に細記して其品等を分ち，室内の温度を平常60度位にして，之を保存する丹精は固より容易の事に非ず，彼の世界大戦争中，佛蘭西の葡萄酒輸出が杜絶せられた時，東洋にボルドウ産古葡萄酒を保蔵する者は，唯我酒倉のみなりと自慢して，各國大公使達を羨ましがらせたのは有名な逸話である」とあるが，高橋箒庵は三井物産社長益田孝と親交があり，明治を代表する茶人の一人である。

最後に，高田慎蔵邸の所在地について，鈴木教授の文章をもう一度引用させていただく。

「高田邸の敷地は震災復興の区画整理によってあとかたもなく消えた。現在湯島の三組坂という交差点から，東に向かって道路を眺めれば，まさにその道路のところが高田邸の中心部なのである。」

高田邸の園遊会については後述するが，この頃の政府高官や富豪といわれる人々にとって，園遊会あるいは自邸での招宴は重要な社交の場であった。今日の日本経済新聞の遠い前身である「中外商業新報」には，園遊会に関する記事が少くない。

例えば，明治39年３月22日には，「益田孝氏の大師会」の見出しとともに，この時の園遊会の様子が伝えられている。そして主なる来賓として，徳川慶喜公，澁澤栄一男爵，三井八郎衛門男爵，安田善次郎，大倉喜八郎，高橋是清，高田慎蔵，原富太郎など24名の氏名が挙げられている。

また，同年11月29日付「中外商業新報」には「井上伯邸園遊会」として，長州出身の政治家井上馨伯爵邸の園遊会の模様が伝えられている。

「当日の数ある趣向中，全く来賓の驚魄せしは，即ち大広間は固より何れの小間に至る迄も総て不動尊像の懸軸及び之に係れる物を以て装ひたる事一事にて」と報じている。そし，庭上には抹茶席の他，ビール，蕎麦，おでん等の模擬店があり，円遊一派の余興が演じられていた。この園遊会の主なる招待客は西園寺首相，三井男爵及び三井三郎助一族，大倉喜八郎，高田慎蔵といった政界及び，実業界の人々の名を伝えている。

ところで，福沢諭吉の婿養子となった福沢桃介は才人として知られているが，昭和4年に『財界人物我観』を出版している。これは，経済雑誌「ダイアモンド」に連載された大正期の有名財界人の人物評を一冊にまとめたものである。そのなかに，

「往時東京で，毎年多数の客を招いて豪勢振りを発揮する実業家の三大招宴なるものがあった。3月28日の高田慎蔵の不動祭，4月8日の大倉喜八郎の感涙会，もう一つは4月21日の益田の大師会だ。」

と記している。ここで言う「益田」とは，三井物産の最高実力者益田孝である。益田孝の「大師会こそ日本一で，天下の名品什宝を集めていた」と，福沢桃介はつけ加えている。

大倉喜八郎の園遊会もその豪勢さで知られていたが，高田慎蔵の「不動祭」もまた人々の注目を集めていただろう。

益田，大倉，高田によってそれぞれ代表される三井物産，大倉組，高田商会は，いずれも兵器商社として世に知られていたが，更には，陸軍省の指導によって「泰平組合」を結成することになるが，これについては後述することにしたい。

明治39年頃の高田商会に入社した仲田定之助は[13]，『下町っ子』（新文明社　昭和39年）を残しているが，「わたしの見た名妓」という文章が収められている。

「その頃美妓として最も人気を博していたのは赤坂の万竜であった。芳艶

ならぶものない佳人として，一世にうたわれた春本の万竜のあで姿は当時ブロマイドに代って流行していた絵葉書や，雑誌の口絵写真に紹介されて誰の眼にもなじんでいた」。

そして，高田商会の若い社員であった仲田定之助も，高田慎蔵邸の園遊会「不動祭」に招かれている。仲田青年は，高田邸の「広間に安置してあった国宝高野山の仏像を拝観したあと，庭園にまわって（中略）豪華な立食の饗応にあづかった。財界，政界などの知名人が大勢集っている片隅」にたたずんでいると，「かねて写真で知っている天下の名妓」が酌をしてくれた。思いがけない美妓の酌にうっとりとしていた仲田青年は，「この眼で万竜を見たことに満足した」と記している。

明治も終る頃の陸相寺内正毅の愛妾であった新橋芸者と，高田慎蔵の愛人とは姉妹芸者であったと取り沙汰されていたと言われているが，真偽の程を確かめることは出来ない。のちに伯爵となり元帥となった寺内と高田慎蔵の密接な関係については既に触れているが，更に後述のように大正14年12月の衆議院予算委員会でも指摘されている。

前述の仲田定之助は，高田邸の広間に置かれていた「国宝高野山の仏像」を拝観しているが，大正初期頃の高田慎蔵は美術収集家としても知られるようになっていた。第一次世界大戦頃から，旧大名，公卿，地方の旧家などの所蔵品の入札による売立てが盛んとなっている。大正５年には伊達家の入札，そしてその翌年５月の上州館林藩主秋元子爵家の入札が有名である。

秋元家の売立てでは，三井物産の実力者益田孝が，現在では国宝に指定されている牧谿の「瀟相夜雨」を入手している。更にこの時，目ぼしい美術品を手に入れた蒐集家として，横浜の豪商で三溪園を今に残している原富太郎，住友男爵とともに，高田慎蔵の名が報じられている（大正６年５月15日付大阪毎日新聞）。

高田邸の園遊会が不動祭と名づけられていたのは，高田慎蔵が所蔵していた弘法大師直筆不動明王の大軸物に由来するものである。

第5章　アームストロング社と高田商会

1．アームストロング社日本総代理店

高田商会が兵器商社として発展していった背景には，アームストロング社の日本総代理店に指定されたことが大きな意味を持っている。

アームストロング社の創始者ウイリアム・ジョージ・アームストロング（1810－1900）は，1855年にアームストロング砲を発明している。幕末期の薩英戦争（1863）では，英国海軍が装備していた火器アームストロング砲によって薩摩藩の陸上砲台はほとんど破壊され，鹿児島市内は猛火に覆われた。のちに日本海軍によって採用されたアームストロング砲は，日清・日露の両戦役で威力を発揮している。アームストロング社に対する信頼感が，信仰にも似て明治期の帝国海軍に深く滲透していたのは，薩摩閥といわれた海軍首脳者の間に薩英戦争当時の記憶が泌みついていたのかも知れない。

明治期の海軍が保有していた主力艦のほとんどが，外国で建造されていた。先ず明治8年にには，「扶桑」など鋼鉄艦3隻が，英国のポップラー・サミューダ社に発注されている。我国最初の近代艦「筑紫」は，明治16年（1883）にアームストロング社から購入されているが，同時に「浪速」及び「高千穂」の2艦の建造が同社に発注された。帝国海軍の主力艦が日本国内の造船所によって建造されるようになったのは大正期に入ってからであるが，それ迄に合計14隻の戦艦及び巡洋艦が，アームストロング社によって建造されている。

日清戦役において活躍した帝国海軍の艦船と艦砲は，アームストロング社製である。このため，明治28年5月，アームストロング社々長ウイリアム・ジョージ・アームストロングは勲二等旭日章を，同社副社長サー・アドリュー・ノーブルは勲二等瑞宝章を受けていることは既に記した通りである。ちなみに，明治25年から39年までの期間における海軍省関係の外国人叙勲者は10名であり，企業関係者は前記の2名のみである(14)。

また，日本海々戦の勝利が英国に伝えられた時，アームストロング社の労仂者達は仕事を休みにして，日本海軍の勝利を祝ったと伝えられている(15)。

明治初期の日本海軍は数多くの外国人を雇いいれているが，その中に元英国海軍中尉ジョーンズ・ジェームズの名がある。英国海軍を退役したジェームズは，ジャーディン・マセソン商会長崎支店勤務のため，幕末の長崎に到着している。そのあと明治５年から15年まで帝国海軍のお雇いとなっている。海軍を辞したのち，アームストロング社代理顧問として軍艦「筑紫」，「浅間」，「磐手」の購入を斡旋している。こうして明治16年にはチリから「筑紫」と，翌17年には「山城丸」及び「高千穂」の日本への回航を指揮している。こうしてジェームズは，明治16年以後明治20年代を通じてアームストロング社の駐日代理人を勤めていたと考えられる。

ところで，品川にある浅間坂は急坂で知られていたが，この坂を平らにするためジェームズは私財を投じている。このため，ジェームズの名が今に残されることになった。

明治維新の幕開け間もない1870年，アームストロング社は，米国の機関銃製造会社ガトリング社の販売代理店になっている。同社の機関銃が英国海軍に採用されたため，アームストロング社は巨額の利益を得ることになった。1883年には，アームストロング社の資本金は200万ポンドに達し，クルップについで世界２位の兵器会社になっている。アームストロング社の発祥の地であるニューキャッスル郊外のエルズウィック工場も，1880年代には一大兵廠に成長していた。

海軍大臣西郷従道は，明治19年（1886）７月から翌年６月まで欧米諸国を歴訪しているが，海軍次官樺山資紀，山本権兵衛少佐（当時）の一行が，明治20年10月に欧米に向けて出発している。高田慎蔵の最初の欧米旅行はその翌年であるが，海軍の一行とどこかで一緒になっただろうか。いずれにせよ，高田もまたアームストロング社を訪れているだろう。

高田商会が，いつ頃からアームストロング社の日本総代理店となったのか，その時期を特定する資料は残されていない。アームストロング社と競合するヴイッカース社が，三井物産を日本総代理店に指定したのは明治30年（1897）である。高田商会がアームストロング社の日本総代理店となったのも，ほぼ

同じ時期であるかも知れない。ちなみにこの頃アームストロング社において起工あるいは進水した帝国海軍の艦船は，下の通りである[16]。

一等戦艦富士　　明治27年12月進水
二等巡洋艦高砂　　同30年５月進水
一等戦艦初瀬　　同31年１月起工
一等巡洋艦浅間　　同　年３月進水
　同　　常磐　　同　年７月進水
　同　　出雲　　同　年５月起工
　同　　盤手　　同　年11月起工

その当時，外国造船所への発注は，現地に駐在する日本国公館附武官あるいは，造船造兵監督官を経由して発注されていた。明治35年，在ロンドン帝国造艦造兵監督官事務所に駐在していた竹内十次郎海軍主計少監（少佐）が，29万円という当時では巨額の公金を拐帯して行方をくらませている。その頃の造艦造兵監督官が，巨額の軍艦購入費を自由に運用し得たことを，この事件は如実に物語っている。

明治30年前後に，アームストロング社が日本から相次いで受注したのは，高田商会の功績とはいえないだろう。むしろ，業務が多忙となったため日本総代理店の設置が必要となり，高田商会が起用されたと考えて良いだろう。

明治41年（1908）４月，高田商会はホッチキス社の日本総代理店になっている。日露戦争当時の帝国陸軍はホッチキス機関銃を採用していたが，やがてこの会社とのライセンス契約に基づいて，機関銃の国内生産が開始されるようになっている。

ホッチキス機関銃の発明者ベンジャミン・ホッチキス（1826－85年）は，アメリカ人であるが，若い頃からフランスに住んでいた。普仏戦争に際しては，フランス陸軍の要請によって従来のルフィー式連発機関砲を改良するとともに，ホッチキス銃砲製造会社を設立している。フランスではサン・ドニ及びリヨンに工場を建てているが，イギリス政府の勧めによってコヴェントリーにも工場を建設した。高田商会が取引を開始したのは，英国ホッチキス

社である。

英国の2大兵器製造業社であるアームストロング社とヴイッカース社は，第一次大戦によって一層の発展をとげたが，戦争の終結とその後に到来した軍縮時代に直面することになった。彼等は平和産業への転換を図ったものの，効果を挙げることは出来なかった。巨額の銀行借入金に苦しんでいたアームストロング社は，英国銀行の介入によって，1927年，ヴイッカース社に合併されてしまった。高田商会が経営に破綻を来たした大正14年から2年後のことである。

2．山内万寿治海軍中将と高田商会

明治期海軍の造兵造船に功績があった山内万寿治海軍中将は，シーメンス・ヴイッカース事件に連座することになり，不幸な晩年を送っている。

山内は，明治6年に海軍兵学寮に入学している。のちに海相，首相を歴任して二・二六事件に倒れた斎藤実大将そして，千島開拓で知られる郡司誠忠予備役大尉はともに同期生であるが，卒業時の山内の成績は首席であった。少尉任官と同時に兵学校砲術教官となり，明治17年には独，仏に留学を命じられているが，以後，造兵・造艦に関心を持つようになった。

明治23年には造兵監督官として，フランスを経由したのち英国に駐在している。英国では，アームストロング社に深い関心を寄せたようである。山内自身の回想によれば[17]，

「当時民間に於いて造兵業を営む者は唯だ『アームストロング』あるのみ（中略）。彼の『ヴィッカース』の如きに至っては，当時尚ほ1個の製鋼業者たるに過ぎざりき[18]』。

「松島」など3艦の副砲あるいは「千代田」の主砲にアームストロング社製12サンチ連射砲が採用されているが，英国在任中の山内がアームストロング社において新式連射砲を精密に検討する機会を得，これの採用を推挙したものである。

明治24年に帰国した山内は，海軍兵備強化のため，官営製鉄所の創設並び

に造兵廠の増設を盛んに説いていた。のちに述べるように，山内は日本製鋼所の設立と関係することになるのは，この辺に遠い伏線があったといえるだろう。更に明治26年には，鉄鋼業の現状視察のため欧米各国に出張している。山内は合計6回にわたって欧米に駐在あるいは出張しているが，その都度，近代兵器に関する新知識を身につけている。

明治38年には海軍中将に任じられているが，その間，呉造兵廠長兼海軍技術会議々員，造兵監督官を経て呉鎮守府司令長官に就任している。山内式砲架の発明など海軍兵器の改良に貢献した山内は，兵科の将官であるよりも造兵関係の将官であることを望んでおり，海軍兵器技術にかかわる仕事に誇りを持っていた。

明治40年（1907）には，男爵の爵位を授けられているが，43年には予備役に編入され，貴族院議員に勅撰されている。予備役編入は，造艦に必要な鋼材を生産する日本製鋼所の設立に参加するためである。

大正3年（1914）1月，時事新報に外電として報じられたシーメンス事件は，やがて山本権兵衛内閣を総辞職に追い込んだ「金剛」事件（ヴィッカース事件）へと発展していった。この疑獄事件で有罪判決を受けた当時の三井物産常務取締役山本条太郎は，のちに満鉄総裁となるが，彼の伝記『山本条太郎』が刊行されている[19]。その中には，山内万寿治と高田商会の関係について，山本条太郎自身の次のような発言が記されている。

「イギリスの造船業者といえば，ヴィッカース商会とアームストロング会社に指を屈するだろう。

わが国のソール・エジエント（輸入総代理店ー引用者）は，ヴィッカースは三井物産で，たしか明治30年ごろと思う。アームストロング社は高田商会であり，その活躍ぶりはじつにすばらしく，三井の方は『三笠』と『香取』をやっと請け負ったのに，高田の方は10数隻も注文をもらっていたそうだ（中略）。

ところで，三井が予備海軍造船総監松尾鶴太郎を技術顧問に招いたのは，高田商会のバックには，山本権兵衛の朋友で海軍の逸材といわれた呉海軍工

廠をつくった山内万寿治海軍中将がひかえていたので，この山内中将と互角の太刀打はできないにしても，なんらか情報ぐらいは入手できると考えたのか，あるいはしかるべき筋から頼まれたのか（後略）」。

高田商会とは現役時代から密接な関係にあったと思われる山内万寿治中将は，日本製鋼所の設立に重要な役割を果している。前出の『回想録』によれば，明治40年の初め頃，アームストロング及びヴィッカース両社の代表が来日したので，山本権兵衛及び斎藤実の両海軍大将とともに「之を井上氏に紹介した」とある。井上氏とは，北海道炭礦汽船社長井上角五郎であり，日本製鋼所の日本側出資者である。ダイヤモンド社編『鋼・機械＜日本製鋼所＞』（昭和43年）によれば，山内中将が北海道炭礦汽船にアームストロング社を紹介し日英合弁会社設立の準備をすすめたのは，明治39年９月頃であったと記されている。

そして，明治40年４月には，

「勅裁の下に，在職（呉鎮守府司令長官－引用者）の儘，日本製鋼所顧問に應ずべし，との命令を大臣（斎藤実海軍大臣－引用者）より蒙るに至りぬ」と前出の『回想録』に記されている。明治43年（1910）７月山内は日本製鋼所取締役会長に就任しているが，大正２年（1913）には会長職を退任してふたたび顧問に就任している。

海軍大臣指示を受けた山内海軍中将が設立当初から関係していた日本製鋼所は，英国資本との合弁会社である。当初の資本金1,000万円の半額は北海道炭礦汽船が出資していたが，この会社はのちに三井財閥の傘下に入ることになる。そして，アームストロング社とヴィッカース社が，それぞれ全体の25パーセントに相当する250万円を出資していた。これらの３社が設立時の株主である。資本金はやがて2,500万円に増資されたが，３社の出資比率に変りはなかった。

アームストロング社の日本総代理店である高田商会とヴィッカース社の代理店三井物産の両社が，設立当初から日本製鋼所に関係していたことは容易に想像される。特に高田商会は，日本製鋼所の国内代理店に指定されていた。

シーメンス・ヴィッカース事件に関連して山内予備役中将は大正3年5月8日，担当検事の事情聴取を受けているが，その時の「聴取書」には次のように記されている[20]。

「私（山内万寿治ー引用者）ノ社長在任時ニ高田商会ヲ製鋼所ノ『エージェント』ニ致シマシタガ，コレハ民間ノ仕事ナドハヤハリ同商会ヲシテ注文ヲ取ラセタ方ガ便利デアリ（中略），高田商会ニ払ウ手数料ハ至ッテ小額デアリマス」

と，高田商会と日本製鋼所の関係が明らかにされている。

検事の追求を受けた山内万寿治は，自殺を図ったものの一命をとりとめ，結局，不起訴となっている。前出の山内中将『回想録』には，高田商会の名は全く出ていないが，次のような興味のある述懐が記されている。

「今も昔も変りなきは，実に御用商人と稱する者どもの勢力なれ。（彼等は）平然法外の利益を取得しつつありき。」

更に，「大正の今日はいざ知らず」日清戦役前の頃には，「官僚の未だ能く外国の事情に通暁せざるを奇貨とし，殆ど詐譎に等しき行為を敢てし，盛んに巨利を」得ていた狡猾な商人がいたことを指摘している。従って，中間に介在する「媒商（代理店ー引用者）の手を借らず之を製造元より直接に仰ぎ，且又製造工程の監視には，必ず担当の監督官を附すべし」と忠告している。

この『回想録』が記述された正確な時期は不明であるが，シーメンス・ヴィッカース事件後の山内中将は，失意を抱いて京都に隠棲している。京都に移住したのち，『回想録』が口述あるいは，記述されたのではないかと推測される。

シーメンス・ヴィッカース事件が世間を騒がせていた頃，この海軍疑獄事件に対する高田商会の関与が何かと憶測されていた。ヴィッカース社の代理店であった三井物産の3人の役員と2人の社員が，有罪判決を受けている。ヴィッカース社よりも遙かに多い軍艦を受注していたアームストロング社の代理店高田商会であれば，それなりの裏工作があっても当然だという推測に

基づいた憶測である。

盛善吉編『シーメンス事件――記録と資料』には，ＮＨＫの報道記者が記した「シーメンス事件を追求して」という文章が掲載されている。そこには，

「ヴィッカース→三井物産と並ぶもう一つのルート，英国のアームストロング社→高田商会→政府高官の面は全く手がつけられずに終っている」

と書かれている。

上記の感想は，番組取材に対する報道記者自身の反省であると同時に，当時の検察当局の追求が高田商会にまで及ばなかったことを不満としているものである。

戦前に書かれた資料を見ていると，山内中将の自殺未遂に関する記述が意識的に避けられているように思われる。ところで，シーメンス・ヴィッカース事件を担当した小原検事（のちの内務，厚生，法務大臣を歴任）の『小原直回顧録』（昭和41年刊。のちに「中公文庫」収録）には，つぎのような記述がある。

「退役海軍中将山内万寿治についても，とかくの評判があり，多額の資産を擁して不正を働いているとの疑いがあったので，前記海軍事件の捜査を終った後，同人に出頭を求めて取調べを行った。」

「前記海軍事件」とは，シーメンス・ヴィッカース事件を指している。「捜査を終った後」とあるのは，三井物産関係の取調べが終ったのち，その競合相手である高田商会と関係の深い山内中将についても，調べてみようということなのだろう。

山内は新たに買求めた大森の住宅の購入資金を，

「他より借入れたものであると陳弁したので，その借先を調べると，これが全く虚偽の作偽であることが明らかとなり，同人にその不都合を詰責したところ，ただ申訳がないと陳謝するだけであった。

同人は帰宅後短銃をもって自殺を図ったが，弾丸が急所を外れて幸いに助かった。傷癒えて後，上司の命によりさらに同人を呼出したが，生ける屍を目前にしてこれを窮迫することの酷なるに忍びず，上司の了解を得て不問に

付することにしたが，寝覚めの悪いことであった。」

山内中将の自殺未遂によって，高田商会をめぐる疑惑の究明は打ち切られることになったが，シーメンス事件が表面化する遙か以前から，山内万寿治中将に対する疑惑が取沙汰されていた。

明治・大正期のジャーナリスト古島一雄が，明治40年3月号から雑誌『日本』に連載していた「雲間寸観」には，

「海軍軍人の富を有する者，一を山内満寿治と為し，而して山本権兵衛之に次ぐ。軍人致富の術を知らんと欲せば，去って造船所に問え」

とある。更に，鵜崎鷺城の『薩の海軍・長の陸軍』（政教社　明治44年）には，

「海軍部内を通じて私財の最も豊かなる者を求むれば何人も先ず指を権兵衛と中将山内満寿治に屈すべし」

と記されている。

「政商」と評されていた高田慎蔵であるが，海軍の山内中将そして陸軍の寺内正毅大将（のちに元帥）との親交を考えれば，否定し得ない批判である。

3．日本製鋼所

明治40年7月，アームストロング社，ヴィッカース社及び北海道炭礦の3社の間で締結された「創立契約」の第1款には，「当製鋼事業の主たる目的は，日本帝国陸海軍の要に応じ，併せて日本および支那における一般の需要に応ずるものとす」とある。創業時の日本製鋼所の代理店として高田商会が起用されていたことは前述の通りであるが，『日本製鋼所社史資料　続巻』（昭和53年）の創立前史あるいは創業時代の項には，高田商会の名は記載されていない。日本製鋼所は大正3年頃から三井の傘下に入っていることから，代理店としての高田商会の地位は急速に低下していったのだろう。

明治41年に東京高商卒業と同時に，設立されたばかりの日本製鋼所に入社した石塚条蔵は，戦後間もなく同社の社長に就任している。やがて公職追放の浮き目にあうが，のちに日本製鋼所会長に就任している。日本経済新聞社

編『私の履歴書　第13集』（昭和36年）に所収されている同氏の回顧録には，創立時の日本製鋼所の様子が興味深く描かれている。ついでながら，大正８年に結婚した同氏の夫人は，「神戸高商を出て高田商会に勤めていた」とある。

石塚氏の『私の履歴書』によれば，将官クラスの海軍技術将校が日本製鋼所の社長に就任するという状況が太平洋戦争の終戦時まで続いていたようである。「日本製鋼所の技術は，ズバリそのまま海軍の技術といって過言でない。だから会社は会社でも，日本製鋼所の性格には一種独特なものがあった」と，石塚氏は記している。